勇者たちの歴史

サークル・草刈や

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦二〇一五年の夏、世界は無数の化け物の襲来を受けた。
日本もまた例外でなく、生き残ったのは僅かな地域のみ
北海道、本州の諏訪地域、四国、沖縄、そして九州の冬木……
他地域と異なり、一切の加護が存在しない冬木の地を護るのは、一人の男だった。
人類存亡の危機に、錬鉄の魔術使い――――衛宮士郎は何を成すのか

Ｆａｔｅ／ｓｔａｙｎｉｇｈｔ　と勇者であるシリーズのクロスオーバーです
時系列的には、勇者であるシリーズの方は正史通り、Ｆａｔｅ側はＵＢＷルート後と

設定しています。

西暦編：表紙

目次

プロローグ ―――――― 1
西暦　合流編
第一話　あの日① ―――― 5
第二話　あの日② ―――― 16
第三話　あの日③ ―――― 28
第四話　あの日④ ―――― 39
第五話　タイム・リミット① ― 55
第六話　タイム・リミット② ― 66
第七話　タイム・リミット③ ― 87
第八話　リミテッド・オーバー① 107
第八・五話　タイム・アウト ― 125
第九話　リミテッド・オーバー② 129
第十話　リミテッド・オーバー③ 146
第十一話　平穏／不穏 ―――― 165

プロローグ

――体は剣で出来ている（I am the born of my sword）

どこかの世界で、一人の男が世界と契約を果たした。

男は非力で、どこまでも頑固だった。

自分の力では助けられないと知りながら、それでも見ず知らずの命を救うために、差し出された呪いを掴み取ったのだ。

世界の救済を願った男は力を得たが、死後の安寧を売り渡した。

それでいいのだと。

それで助けられるのなら構わないのだと、男は心底から願ったのだ。

――血潮は鉄で（Steel is my body, and fire is my blood）心は硝子（I have created over）

幾たびの戦場を越えて不敗（a thousand blades）

理想に裏切られ、かつての願いに絶望した男がいた。

男は自身を誤りだと称し、世界に刻まれた自分を消滅させようと目論んだ。

機会は、万に一つの可能性。

奇跡のような巡りあわせと、策謀を張り巡らせた先にようやく掴めるかどうか。
男は諦めなかった。
ただひたすらに待ち、
数多の戦場を駆け抜ける内に摩耗し、
もはや自身すら定かでなくなった果てに、ようやくその好機は訪れた。
――ただの一度の敗走も／はなく（Unknown to Death／Unaware of loss）――ただの一度の勝利もなし（Nor aware of gain）
こうして、彼は剣を交えた。
それは技量を競う闘いではなく、命を奪い合う殺し合いとも僅かに異なる。
それは、正義と正義が鎬を削る、信念がぶつかり合う戦場だった。
男は、自身の正義を誤りだと断じていた。
少年は、自身の正義を間違いじゃないと胸を張った。
どちらも、自身にとっては正しいと信じる答えだった。
男は頑固だった。
それは少年も同じことで、故に説得は無意味だと互いに理解していた。
結局、男は過去の自分を『間違い』とはできず。
少年は、その末路を知ってなお、憧れた正義を張り通した。
戦いは終わり、千載一遇の機会は失われた。

男はこれからも望まぬ仕事を果たすことになる。人という種が消えるその時まで。
けれど、男はもう自分殺しなど願いはしない。
大丈夫、と言った言葉に偽りはない。
彼は正義の味方の信念を抱き、守護者としてあり続ける。
少年は、末路を知ってなお、理想を追うと心に決めた。
彼が進むのは、かつて男が通った道であり、けれど男とは違う先に行き着くだろう。
彼には、赤い悪魔が付いている。
彼女がその手を放さない限り、主従が交わした最後の誓いは果たされるだろう。
――担い手はここに独り剣の丘で鉄を鍛つ（Withstood pain to create weapons, waiting for one's arrival）
少年の未来は、邂逅した未来の自身とは異なるだろう。
だが、本質的に彼らは同じ人間である。
何かを助ける為ならまず自分を勘定から外す、その思考が変わった訳ではない。
世界との契約もその一つ。
末路を知る少年は別の選択を取るだろうか。
最善と考えたのなら、迷わず選んでしまうのだろうか。
――――ならば我が生涯に意味は不要ず（I have no regrets. This is the only path My whole life was）
――この体は、
無限の剣で出来ていた（"unlimited blade works"）

少年はいずれ、その選択を迫られる。
この『交錯した並行世界』も例外ではない。

西暦二〇一五年七月三〇日、夜。
世界は、人類は、無数の化け物に蹂躙されることになる。

西暦　合流編

第一話　あの日①

二〇一七年十二月八日。

灰色の雲が空を重く覆う。

雪でも降り出しそうな天気だが、この曇天は二年前から続く異常気象だ。

その間、雪はおろか雨の一滴も降っていない。

それを不審に思う者も、この冬木にはいない。住民たちは皆『あの日』に起きた出来事を目にしているのだから。

街を囲むようにそびえ立つ、六本の巨大な柱も『あの日』起きた変化の一つ。

透明な巨木を模した柱は、近づけば水晶の塊であることが分かる。内部で脈動する赤や青の流動が融解した宝石であることまで思い至る者はいないだろうが、それでも見慣れてしまったという事実に変わりはない。

そんな柱の一本に、男は――衛宮士郎は立っていた。

赤い外套をはためかせ、手には黒い洋弓が握られている。陰陽一対の短剣と同様に使

い慣れた武装だが、この二年のうちに幾度も使い潰してしまった。
冬の外気が肌を刺す。
首のマフラーを巻き直しながら、何かを捉えた士郎の眼が鋭い光を宿した。押し殺した低い声が、忌々しげに言葉を紡ぐ。
「……まったく、懲りない連中だ」
魔術回路が起動する。身体に満ちる活性化した魔力を感じながら、士郎の脳裏に『あの日』の光景が蘇っていた。

二〇一五年七月三〇日。
その日、衛宮士郎は数年ぶりに帰郷していた。
遠坂凛からの協力要請、という名の一方的な協力の取り付けがあったからだが、ともかく中東にいた彼は帰宅後、発生した強い地震の後片付けを方々で手伝っていた。その途中で姉代わりだった人物に捕まり、遠坂邸に向かうことができたのはすっかり暗くなったころだった。
まさか藤ねえだけじゃなくて、藤村組が総出で参加してくるとは……。
思わぬ計算違いにため息を漏らすと、後ろからクスクスと笑い声が聞こえてきた。
「なんだ、桜。今日の宴会、そんなに面白かったか?」

「……はい、とっても。先輩がこの街を出てから、一番笑ったかもしれません」
振り返ると、すぐ後ろで間桐桜が穏やかな笑顔を浮かべていた。
「まあ、藤ねえの腹踊りは予想外だったな。不意打ちもいいところだった」
「わたしや藤村組の人たちは止めたんですけれど、藤村先生、『士郎が、よ、う、や、く、帰ってきて……私は、わたしはぁ！　この感情を！　もう止められない、止めてくれるな桜ちゃん！』って、強行しちゃって……」
宴会の一番盛り上がった場面ではあるのだが、三十も半ばを過ぎた女性がする余興としては身体を張り過ぎじゃなかろうか。ちなみに大虎は、一升瓶を何本も空けて今は衛宮邸で夢心地だったりする。
明日も平日なのに教員の仕事は大丈夫なのか？　と少し心配もしたが、若い組員が介抱して連れて帰ると言っていたから大丈夫だろう。宴会の片づけも、今は一人で暮らしている桜を付き添いなしで帰すわけにもいかないから、これも言葉に甘えてお任せする。
「藤ねえも、そろそろ落ち着いてると思ったんだけど、十年経っても変わらずか」
「そうですね、先生はあまり変わってないかもしれません。先輩は、」
ふと、桜の手が士郎の髪に伸びる。
白髪交じりの頭に、浅黒く変色した部分が目立つ肌。

「……少しだけ、変わったかも知れませんね」
「そうだな。最近は遠坂にも脅されてたし、正直知り合いに会っても気づかれないんじゃないかって覚悟はしてた」
「身長もだいぶ高くなってますし、何だかちょっと不思議な気分です」
でも藤村先生はすぐ気づかれたんですよね？　と確認する声に、苦笑気味に士郎が頷く。
野生動物の直感、侮るべからず。大河は一目見ただけで正体を看破したらしく、獲物が気づくより一瞬早く背後からタックルを敢行。薄情者の弟分はあえなく御用となった。
「わたしもびっくりしたんですよ？　お掃除してたら、いきなり簀巻きにされた先輩が投げ込まれて、そこからすごい剣幕の先生が入ってきたかと思ったらそのままお説教を始めて」
「……藤ねえには、いろいろ心配かけてるのは自覚してたんだけどな、認識が甘かった。次からは電話くらい、ってこの話は昼間にさんざんやったろ？　もう勘弁だ」
がっくり肩を落とす士郎だったが、クスクスと笑いが収まらない様子の同行人にジトっとした目を向ける。
「そう言う桜の方こそ、結構印象が変わったと思うぞ」

「え？　そ、そうですか……？」
「ああ。もともと落ち着いた雰囲気はあったけど、今はすごく、」
マテ、何かとてつもなくハズカシイことを言おうとしていないか？
硬直したまま隣を盗み見ると、頬を染めて俯いた桜の姿があった。
士郎も、今さら気障な台詞一つで赤面するほど初心な経歴ではないはずなのだが、自覚というものは恐ろしい。相手が初対面なら言い捨てで済むのだが、なまじ身内相手にそうはいかない。
一気に口数も減ってしまい、無言のまま坂を上る。
「……、……ぁ」
間桐邸の大きな鉄門が見えた瞬間、桜の口から安堵と逡巡の入り混じった吐息が漏れた。
この後、士郎は凛の所へ行く予定がある。
彼女のことだ、わざわざ海外で活動していた士郎を呼び寄せたのだから大変な仕事になるのは容易に想像がつく。空いた時間も、士郎は震災の後片付けに協力すると話していた。士郎と桜がゆっくり話せる機会は、これで最後かもしれない。
士郎が桜を家に送るのは実に十年振りのことだ。
あの時も、藤ねえ――藤村大河が主催した送別会兼宴会の帰り道だった。とりとめの

ないことばかりを話した気がするが、内容まではよく覚えていない。それきり、冬木に帰っていなかった士郎は桜と接点がなかった。

冬木を発つ前、二人の最後の会話は別れの挨拶だった。

ちょうどその時の再現のように、間桐邸を背にした桜が笑みを作る。

「それでは、失礼します。送ってくださって、ありがとうございます」

「いや。こっちこそ、藤ねえの我がままに付き合ってくれてありがとう。これからも、あの人とうまく付き合ってくれると助かる」

「はい、先輩もあまり無茶はしないでくださいね？　姉さんのことだから、きっと大変な仕事に付き合わされると思いますから」

少しだけ、けれど確かに驚いた顔をした士郎に向けて、

「おやすみなさい、……えっと、え、えみ」

桜が発した、十年前とは違う別れの台詞は、最期まで言葉になる事はなかった。

――不意に、街の灯が消える。

「ッ!?　桜、少しだけ動くな！」

「え？　は、はいッ！」

動揺する桜を背に庇い、士郎が周囲を警戒する。

坂の上に位置する間桐邸からは冬木市全域が一望できる。その街の明かりが、ひとつ

残らず消えて闇に落ちていた。
大規模な停電だろうか？　いや、それにしては周囲に満ちた気配が異常すぎる。
魔術師の手による攻撃か？　魔術師のサーヴァントでもあるまいし、凛に気づかれる隙もなくこれほどの規模の攻撃が可能とも思えない。
ならばサーヴァントの手によるものか？　分からないが、大気に混ざった気配は神代の彼らに勝るとも劣らない。
一つだけ分かることがあるならば、この停電はただの始まりに過ぎないだろうということだけ……！
「――投影（トレース・オン）、開始」
慣れ親しんだ双剣を両の手に握る。
干将と莫耶、二刀一対の宝具。かつての聖杯戦争で幾度も投影し、その後も戦場で命をかけてきた最も馴染んだ武装。
剣を構え、臨戦態勢を整えた士郎の眼に、初めてその姿が映った。
「――――、なんだ、あれ」
違和感を覚え、空を見上げたのが功を奏した。
街の明かりが消え、満天に輝く無数の星々。
だが不動のはずの瞬きは、不気味に揺らめき大きさを増していく。側溝を泳ぐ蟲のよ

うに、近づいてくる様はまるで生き物のようだ。
星は流星雨のように降り注いできた。コメ粒ほどのサイズが、接近するにつれて人間より一回り以上大きいことが分かった。飛来物は不自然な等速を続けながら地表に近づいていき、ボトリと周囲に接地した。
「……魔獣か合成獣（キメラ）の類か？　少なくとも意思疎通は出来なさそうだ」
「敵意はないんでしょうか？　けど、ただのキメラにしては、その、」
桜が言葉に出来なかった部分を、士郎もまた感覚で理解していた。
目の前の存在から感じる膨大な魔力。それがどれほどの神秘を持つのかは推測するしかないが、英霊たちやその宝具にも匹敵するかもしれない。
サーヴァントの切り札にも近しい存在が、雨のように降り注ぐ。
魔術師であれば神秘の秘匿を思い卒倒するかもしれない状況だったが、それを許してくれるほど現実というものは甘くないらしい。

のそり、と蠢いた星もどきは、音もなく身体を浮かべると口のような器官を大きく開いた。
そして次の瞬間、士郎に向かって勢いよく襲い掛かった。
「く、ッこの……！」

眼前に迫る化け物の顎を、士郎は双剣で真正面から受け止める。
退くことはできない、後ろには桜がいる。衝撃をその場で殺しきり、動きが止まった敵に逆手に持ち替えた莫耶を突き立てる。投影品ながら確かな神秘を有した宝具は、白い身体に深々と潜り込んだ。
「抉れ……ッ！」
莫耶へ魔力を流し込み、伸びた刀身が獲物を貫き外へ抜ける。
――オーバーエッジ。
長剣を振り抜くと、化け物は断末魔を上げて消滅した。
「――桜、俺の傍から離れるなよ」
「はい、すみません……先輩」
ギュッと背中を掴む感触が伝わってくる。
桜を護り迎え撃つ決意を固めながら、士郎もまた焦っていた。
今の化け物の動きは、士郎という存在を認識して襲ってきていた。だがそれにしては、初動が緩慢に過ぎる。士郎を襲うつもりだったというより、士郎が目に入ったから飛び掛かったように思えた。
つまり、認識したものを無差別に襲う可能性があるということ。冬木の街にも多数の化け物が落下している。今頃、街中は大変な騒ぎになっているに違いない。

そして、厄介なのが化け物たちは神秘を帯びた存在だということ。サーヴァントどころか並みの魔術師と比較しても大した敵ではないが、それは士郎が投影品とはいえ宝具を扱う存在であるからだ。神秘は神秘を以てしか対抗足りえず、一般の人間には抵抗することも許されない。

「くそ、こいつら……！」

迷う暇などなく、周囲に散らばっていた化け物たちが次々に二人を喰おうと襲来する。

二体目は、莫耶で唐竹割りに断ち割った。

三体目は干将をオーバーエッジにし、薙ぎ払った。

四体目と五体目は、双剣を投擲して近づく前に屠り、壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）の余波で体勢を崩した六体目も投影し直した干将を投げつけ爆砕。

「背後（うしろ）です、先輩……ッ」

桜の声に、振り向きざまに切り払った逆手持ちの莫耶が、化け物を側面から貫き留める。

剣を長大化させると、跡形もなく霧散した。間桐邸付近に落ちた化け物は、今の一体で最後だったらしい。

「――ひとまず切り抜けたな。桜、怪我はないか？」

「はい……ありがとうございます、先輩」
夫婦剣を投影し直し、緊張の糸を張り詰める。
士郎にとって化け物は難敵ではないが、不意打ちを受けて切り抜けられるほど易い相手でもない。咄嗟の対応の遅れが、容易に死へと直結する。
「これから遠坂の所に行く。桜は、そこで避難しててくれ」
「……先輩はどうするんですか？　まさか、街に落ちたもの全てをどうにかする気じゃないですよね……!?」
悲痛な声だった。
疑問の形はとっているが、士郎がこの状況でどう行動するか、桜はよく知っている。そして、自分が彼の助けになれないことも理解している。
今この瞬間、彼の助けになれる人間など、この街に一人しかいないことも。
「ああ――――ッ！　いた、ようやく見つけたわよ、士郎！」
そして、張り詰めた間桐邸前に遠坂凛が現れた。
士郎が桜を置いていけない理由が、完全に消滅した。

――――冬木市周辺に巨大な晶柱が顕現するまで、あと三時間余り。

第二話　あの日②

遠坂凛は、冬木のセカンドオーナーたる遠坂家の当主だ。
一族の当主として霊地と龍脈の管理を行うが、時計塔所属の魔術師としての仕事も当然請け負っている。現在の仕事は、冬木の地に存在する大聖杯の調査、及び簡易儀式の確立である。
凛としては、聖杯戦争という儀式に未練はない。
だが時計塔の上層部にとって、それも降霊科のロードが非常に興味を惹かれる案件らしく、解体の目途が立つまでの場繋ぎ的な仕事として、期限未定の白紙委任状が届けられた。一応、遠坂と間桐の両家が反対の意を示したが、上層部の決定は覆らなかった。
そんな訳で、凛はこの五年近く、宝石魔術の研鑽と並行して大聖杯の調査を行ってきたのだが、めぼしい成果はあがらず、士郎を呼んだのも愚痴を言う相手が欲しかったというどうしようもない理由だった。
彼女のいう所の「心の贅肉」が不足した結果の行動と言える。
ところが、士郎が日本に帰国する前日に状況が急変した。

『……そうか。冬木の霊脈にも出たのか、龍紋が』

「はい、定期的に行っていた簡易な調査でもはっきりと分かるレベルでした。これで、ほぼすべての国で観測されたのではないでしょうか」

時計塔における後見人、そして所属する教室の講師と言葉を交わしながら、凛は思考の海に沈んでいく。世界中で観測されている現象とはいえ、実際に目の当たりにするとその不可解さに頭を抱える羽目になった。根本的な解消法は、残念なことに思いつきそうもない。

霊脈とは、大地に流れる魔力の軌跡、この星の命の脈動である。

そして龍紋とは、霊脈の場所・形が不定的に変化し続ける現象のことである。魔術師にとって、霊脈は彼らの生命線といえる霊地の在り方に関連するものである。より優れた霊地に工房を構えることが魔術師にとっての死活問題となり得るのだが、前述の龍紋の影響によって一級と評された霊地の幾つかが、その力を完全に喪失する事例が確認されている。

冬木も例外ではなく、既に遠坂邸の建つ土地は霊地として完全に力を失っており、現在はアインツベルン所有の古城が冬木における第一級の霊地となっている。

最も、今なお霊脈は変化を続けているため、もはや霊地という概念は死んだに等しい。

各魔術協会も非常に憂慮しており、あらゆる枠を超えて調査が続けられているが現象

は世界に広まるばかりであり、唯一不自然なまでに観測されていなかった日本でも今回発生してしまった。

とはいえ、冬木での観測結果は悲観する内容ばかりではなかった。

驚くべきことに、霊脈の分散という異常な状態にあっても大聖杯は定量の魔力を蓄え続けていた。凛は、この観測結果を基に龍紋発生下でも霊地の安定化が可能ではないかと考え、時計塔で最も多角的な知見を有するロードに相談を持ち掛けたのだ。

『君のアイディアは、龍紋に対して効果的に働くだろう。幾つかの問題はあるが、霊地の安定化という至上命題に対しては今の段階で思いつく課題はない。強いて言うなら、パワーバランスが崩れることを上の連中が嫌がるだろう、ということくらいか』

「……しかし、現状では魔導の衰退は避けられません。後の混乱を考慮しても、今はあらゆる手を打つべきではないでしょうか?」

『同感だ、実に下らない。ミス・遠坂、礼装の開発を進めてくれ。上の説得と事後の対応は、私が他のロードに頼み込むとしよう』

こういう時に権力争いに無縁な立場は役に立つ、と妙に自信ありげな言葉に苦笑する。

実際、凛のアイディアには問題点が存在する。

特に大きな問題は二つあり、複雑な大聖杯の仕組みの内どれが目当ての機能を担って

いるのか、それが単体で成り立つ仕組みなのかを調べ、簡易化した礼装を開発する必要があることが一つ。もう一つは、礼装が簡易化すればするほど、他の目的に濫用されやすくなる、ということだ。前者は今までの調査内容から分析を進められるが、後者は多様な場合が考えられるためイタチごっこになるだろう。

一番考えられるのは、分散した霊脈のマナを取り合う展開だろうか。元が一等の霊地だろうが、ほとんど何の力もない下級の霊地だろうが、ただの土地も同然の今、礼装の機能に土地のマナが影響することはそう調整しない限りあり得ない。

そうなれば、当然起こるのは取ったもの勝ちの争奪戦だ。元の霊地より多くマナを確保しているだの、低く偽装して難癖付けているだの、わざと争いを起こさせて漁夫の利を得ようとする魔術師も出てくるかもしれない。

正直、その辺りの知恵が浮かばず相談したのだが、面倒ごとをまとめて引き受けてくれるというなら渡りに船だ。この偏屈だがお人好しのロードなら、適当に投げ出さず真摯に取り組んでくれるだろう。

肩の荷がそれなりに下りた凛はさっそく礼装づくりに励むことにしたのだが、まずは大聖杯について情報を整理していかなければならない。必要な事柄が把握できていなければ、改めて調査に出なければならないのだから頭の痛い話である。

そして翌日の夜、

「……まあ、全然足りないわよねぇ、そりゃ」

地下の工房で引きつった笑みを浮かべる、遠坂現当主の姿があった。

最も、予想はしていたのだ。元々収集していた情報は、あくまで聖杯戦争を縮小し、簡易化した模倣儀式の開発に必要なものであって、霊脈から六十年もかけて魔力を蓄積する機能など簡易化から最も遠いものだ。

寧ろ、持っていた情報を分析した結果、今の状態でも大聖杯を稼働させ得ることが分かってしまった。とんだ藪蛇である。これで調査にしろ、封印にしろ、大空洞に行かねばならない名目ができてしまったのだから。

「アインツベルンめ。何が『もう願望器としての機能は破損しておる』よ、しっかり動いてんじゃない。まあ、この世全ての悪をどうにかできたのは大きいけど、協力するってんならしっかり最後までやりなさいよね！」

がぁーーッ、と気炎を吐くが後の祭り。錬金術の大家は、五年前の大聖杯解体（未遂）の際にこの世全ての悪の乖離と事後対応に協力していったが、対価として肝心の機能が破壊されている大聖杯の後始末と間桐、遠坂との縁切りを取り付けていった。なので、今さら何を言っても取り合ってくれないだろう。

もう一方の協力者であった聖堂教会は、魔術には門外漢ばかり。アインツベルンが気づけなかった見落としに遠坂が気づけなかったように、専門外である聖堂教会側に責任

はないだろう。
結局、遠坂家がやる他ないという状況は変わらない。
「あーあ、面倒なことになっちゃったわね……、……あれ？」
思わずぼやいた凛だったが、突然消えた電灯に首を傾げた。
――――確か、一週間前に替えたはずだけど。
「……敵、侵入者？　けれど、結界には何の反応もない」
使い魔の情報から、停電が自宅だけではないことも把握している。
もし敵対する魔術師の攻撃ならば、ここまで無差別で大規模になる必要はない。
かといって、偶然の事故と片付けるには違和感が残る。身もふたもない言い方をするならば、彼女の中の本能が警鐘をならしている感覚。女の勘、などという言葉を昔使ったが、今の違和感はそれに近い。
外へ出て、冬木に着いているだろう士郎と合流するか。
あるいは、工房を封鎖して情報をもっと収集するか。
「……えーーい！　女は度胸よ、覚悟を決めなさい遠坂凛！」
逡巡は一瞬のこと、新たに用意していた切り札の宝石を複数ひっつかむと、凛は遠坂邸を飛び出した。
「まずは士郎ね、あいつと合流してから考える！」

大雑把だが行動方針を立て、使い魔を総動員して街を探す。
宝石魔術の使い魔は目立ちやすいという欠点はあるものの、生体と違い必要な時に込めた魔術を開放するだけで即座に使用できるという長所がある。とはいえ、宝石は消耗品であり、切迫した遠坂家の経済状況としては無駄遣いを避けたいところだが。
新都に二体、衛宮邸に一体、柳洞寺周辺に二体用意していたが、士郎の姿は見当たらない。
使い魔の捜索範囲を広げるべきかと考えるが、入れ違いになる可能性もある。
「仕方ない。こうなったら、士郎の行きそうな所をしらみ潰しに当たっていくしか、」
考えながら歩いていたせいだろう。
不意に、自分の視界に影が落ちていることに気づいた。
森の中なら、木陰だろうと気にもならないに違いない。新都でも、ビルや背の高い建物の影に踏み込んでいたなら気付くこともなかっただろう。
だが、ここは住宅街。夜空の光を遮るものなどなく、
「ちょ……、なぁ……ッ!?」
大口を開いて迫ってきた異形を、凛は間一髪で回避した。
白く、口のような器官以外に目立った特徴のない外見。時計塔で、実験で生まれた合成生物は見飽きたと思っていたが、ここまで機能を単一に絞ったデザインは初めてだ。

人間より一回り以上大きな身体は僅かに浮き上がり、こちらの様子を窺っている。
……さっきの様子から見て、こちらを喰うつもりでいるのだろうか。
「冗談、まっぴらお断りよ」
弾かれたように、勢いよく襲い来る白い化け物。
「――――Anfang（セット）」
対して凛は、握っていた石の中から黒曜石を選んで放り投げる。
「Gewicht（重）, um（圧）zuVerdoppelung（束縛）（両極）（硝）――――！」
猛烈な荷重が、対象を大地に押しつぶす。
彼のギリシャの英雄すら動きを封じ込めた魔術は、未知の異形にも例外なく力を発揮する。
もがくような動きも僅かな間のみ、抵抗空しく平たく潰れた化け物はあっけなく消滅した。
「使い魔かしら。それとも幻獣が表に出てきたとか？」
首を傾げる間に、周囲に漂っていた化け物がゆっくりと距離を縮めてくる。
「なんにせよ、冬木はわたしが管理する土地――――好き勝手は許さない。徹底的に叩いて潰して、降参する意思もまとめて砕いてあげるから、覚悟なさい――――ッ！」
宝石が幾色もの軌跡を描き、緻密で暴力的な閃光が炸裂する。

二十三いた化け物は、瞬く間に十が弾けて散った。
四は炎に焼き尽くされ、三は不可視の風に切り刻まれる。
残りの六は、宝石の魔弾に貫かれて消滅した。
遠坂凛――彼女は、敵が未知の化け物だろうと萎縮するような性質ではない。刃向かう敵は一切の容赦なく叩きのめし、徹底的に事を成すのが彼女の流儀である。
五大元素使い（アベレージワン）の一流魔術師を、有象無象の化け物が止められるはずもない。
あかいあくまの蹂躙は、彼女の目的が果たされるまで続けられた。

☆　☆　☆　☆

「ああ――――ッ！　いた、ようやく見つけたわよ、士郎！」
響き渡る声は、士郎も桜もよく聞き慣れたもの。
現れた遠坂凛は、二人よりいくらか落ち着いた様子で息を吐いた。
「はあ、手当たり次第に当たるつもりだったけど。近くにいたのは僥倖だわ、二人とも怪我してないわよね？」
「ああ、俺は問題ない」
「はい。私も、先輩に護っていただいたので、無事です」
二人の答えに、凛はよしと頷く。
「なら、これからの方針を決めるわ。状況だけに、あまり時間はかけられないけど」

二人の反応を確認し、凛は冷静に言葉を続ける。
「まず、侵入してきたあの白いのについてだけど、細かいことは一切分からない。ただ、数が多すぎるわね。使い魔越しに確認できただけでも、四百か、五百か……街の外からもどんどん入り込んでるから、それ以上にいるでしょうね」
……分かっていたことだが、状況は最悪だった。
ただの人間では抗うことも出来ない化け物が、五百以上。既に侵入を許している今、取れる手段は迎撃ではなく撃破。いや、一体も残さず殲滅するしかない。
だが、それも現実的ではない。
「あいつら、わたしのガンドじゃ怯むだけで傷もつかなかった。宝石を使えば倒せるけど、多勢に無勢でこっちの手が尽きちゃうだろうし……悪いけど、衛宮くん」
「ああ。あの化け物の相手は、俺がする」
「え？　ああ、いや、それはお願いするんだけど、」
士郎は即座に頷く。あてがわれた役に自分は適任だと、彼は十分理解している。
遠坂家の宝石魔術は、高い威力を誇る反面、コストが非常に高い。まさに等価交換の魔術の原則を体現した魔術であり、士郎の投影はその原則に反した例外だ。終わりの見えない消耗戦ならば、凛の魔術より遙かに向いている。
ただ、その速すぎる反応に慌てて言葉が付け足された。

「――衛宮くんには時間稼ぎをして欲しいの、わたしが状況をどうにかするまで」
「――――――む、」
「えっと、姉さん、どうにかするって具体的には何をするつもりなんですか？」
困惑に押し黙る士郎の代わりに、桜が疑問を投げかける。
彼女は単純に、自分にも出来る何かを求めていた。凛の策が何かは分からないが、内容次第で桜も手助けが出来るかもしれないのだから。
期待の眼差しを受けた姉は、気まずそうに目を逸らした。
「……、……」
「……えっと、姉さん？」
姉らしからぬその光景に首を傾げる。
妙に歯切れの悪い。それほど話したくないものなのか、あるいは説明の難しい儀式でも執り行うのだろうか……？
結局、たっぷり一分近くも押し黙った凛は苦虫を噛み潰した顔で呻いた。
「……そう、何をするか。何をすればいいのか、それさえ考えつけば、あんな白いの簡単に片付くのに……ッ！」
わしわしと頭をかき乱し、最後に深々と息を吐いた凛の目は据わっていた。
桜の手を握り、士郎に向かって開いた左手を突きつける。

「いい、士郎――街の人たちは柳洞寺に逃がしなさい、そこに結界を張っておくから。それと、深追いは禁止よ。あくまで倒すのは街に入り込んだ敵だけ、外の奴らまで刺激することはないわ」
「待て遠坂、結局何をするつもりなんだ？」
「説明がないと、流石に私も先輩も動きづらいと言うか……」
再び、重苦しい沈黙が訪れる、かと思われた。
「……大聖杯を起動させるのよ」
「なッ！？」
「えぇ……ッ！？」

一分後、魔術師と魔術使いが行動を開始する。
――冬木市周辺に巨大な晶柱が顕現するまで、あと二時間半。

第三話　あの日③

白い化け物の襲来から三十分が経過した。
冬木市全域に降り注いだそれらは、家屋を破壊しながら獲物を探し、見つけた先から喰らい、潰し、殺していった。
抵抗しようとする人間もいたが、彼らは侵入者に傷一つ付けられず、その白い身体を血で染めるのが精一杯であった。逃げようとした人間も、浮遊し、障害物を気にもしない化け物たちに容易に追いつかれ、その命を散らしていった。
一般社会に生きる彼らは知る由もなかったが、白い化け物は神秘を宿した存在であり、同様に神秘を宿すものでなければ干渉することもできない。故に、殺戮は常に一方的であり、冬木の住民は刻一刻とその数を減らしていった。
一部の、ほんの一握りの例外を除いて。
――――陰陽の刃が夜闇に踊る。
「であ……ッ！」
母娘に襲い掛かった化け物は、中空で無残に切り伏せられた。

耳障りな断末魔は同種を引き寄せる効果でもあるのか、わらわらと姿を見せる新手を前に、士郎は刃の零れた短剣を投影し直す。

「……あ、ありがとうございます……」

「礼はいい。合図をしたら、俺の指した方向へ走って逃げてくれ」

士郎の言葉に、背後に庇われた母親が絶句する。

周囲を取り囲む異形の数は三十以上、三人の獲物を狙う白い垣根に隙間などどこにも見えない。そもそも逃げたところで、安全な場所などあるのだろうか。

「で、でも……こんな数、無理です！　すぐに追いつかれてしまいます！」

「……今のままなら、そうだろうな。けれど、問題ない」

母親の絶望を士郎が切り捨てた直後、化け物たちに変化が起きた。

取り囲んでいた数十の個体が一か所に集まり、溶け合うように姿形を変えていく。人間より一回りほど大きかった化け物たちは、見上げるほどの巨体になっていく。

それらは既に、数回の戦闘を経て、士郎を単体では殺すことのできない存在だと認識していた。

いかなる手段によってか、彼の存在は化け物の間に共有され、対抗する為の方法を確立しようとしている。化け物たちが選択したのは、自分たちを上回る強者に対し、それを更に凌駕する存在へと『進化』することだった。

通常、進化とは万や億を超える年月を費やして行われるものだが、化け物はそれを僅か数分の間に成し遂げている。もはや生物の原則に縛られない、超越した能力ともいえる。

――士郎は、その『進化』の性質を逆手に取った。

「今だ――走れ！」

右手の剣先を空いた空間へ向けた直後、化け物の進化が完了した。

それは、大弓のような形状だった。中央――矢摺籐に位置する部分には大穴が開き、矢の形をしたものが生み出されている。穴の左右からは細長い腕が伸び、その先にも本体と同様の器官が創られていて、獲物に狙いを付けている。

母娘が駆けだすのと同時、射出された光の矢を士郎が跳躍し空中で叩き落とす。

「走れ――そのまま、柳洞寺に向かえ！」

「ッ、は、はい……ッ」

そうだ、逃げろ。早く、早く、逃げてしまえ。

逃げる二人を射線から庇うように、士郎が双剣を構え直す。

「さっき見たのとは、また随分と違う。一種の個性みたいなものなのか？」

疑問が意図せず零れたが、当然返答はない。

代わりに音速で放たれた三本の矢を、夫婦剣で難なく捌く。

進化を遂げた化け物とやり合うのは、これで十度目。士郎も初めは驚いたが、そういうものだと納得してからは、寧ろ積極的に進化をするよう立ち回ってきた。

進化を遂げると、化け物は格段に強くなる。それと同時に、行動そのものも進化前から多少変化することも分かってきた。

それは、無差別な人間の殺戮よりも、士郎のみを殺す行動を優先するようになるというもの。

士郎を殺すため、進化をした影響だろうか。

あるいは、単純自分たちを殺し得る存在を優先して排除したがっているだけだろうか。

理由ははっきりしないが、士郎にとっては好都合な変化だ。

「――投影（トレース・オン）、開始」

双剣を投擲し、すぐさま新たな短剣を両手に握る。

投げ放たれた陰陽の剣は細腕を断ち切り、後方へ抜けて消える。化け物は動揺もなく本体の穴に矢を生み出し、正面の敵に照準を定めた。

「ッ――、投影（トレース・オン）、開始」

標的は、狙いから逃れず真正面からの接近を選択した。

武装は変わらず、一対の短剣。

狙い違わず頭部へ向けて撃ち出された巨大な矢を、交差させた干将と莫耶で受け止める。

拮抗は一瞬、夫婦剣は無残に砕けて消滅する。だが、その一瞬の衝突が軌道を歪め、必殺の威力を誇る矢は無人の家屋を粉砕しただけに終わる。

「――凍結（フリーズ・アウト）、解除、――――はッ、だぁ――――ッ!!」

現れた隙を、士郎が見逃すはずもない。

準備を終えていた干将・莫耶を、もう一度両手に握る。

瞬時に強化し、オーバーエッジ。

長大になった双剣は容易く化け物の身体を切り裂き、とどめを刺した。

「――――、はぁ、はぁ、……次は、」

オーバーエッジを破棄し、新たに投影をしながら周囲を窺う。

辺りにいた化け物は、今の進化体に軒並み融合していたらしい。近づこうとする気配はなく、彼は僅かに緊張を緩めて息を吐いた。

これで、深山町は大体見て回ったことになる。

目についた生存者は柳洞寺へ誘導できたが、それでも数百人程度。もちろん全てではないだろうが、相当な数の人間が犠牲になったことは間違いない。

「……くそッ、俺は……」

殺された彼らは、救わなければならない命だった。
少なくとも、士郎にとっては。全ての命を救う『正義の味方』を目指す彼にとって、救えなかったという事実は何よりも重く沈み込む。
握りしめた手の中で、剣の柄が悲鳴を上げた。
士郎が集中を欠いていた、あるいは冷静さを失っているのは間違いない。少なくとも、平時の彼なら気付けたはずだった。
今、自身が何処にいるのかということに。
自分の背後から、誰かが近づいてきていることに。
「……あれ、士郎……？」
「……、藤ね、え……」
幸運だったのは、彼女が怪我一つ負っていなかったことだろう。
不幸だったのは、彼に魔術という非日常を隠す余裕がなかったことだろう。
異形に襲われ、日常が崩壊した冬木の夜。
魔術使いの衛宮士郎は、藤村大河と遭遇する。

襲撃から僅かな時間で、すでに柳洞寺の建つ円蔵山には多くの住人が逃げ込んでいた。

円蔵山は、この地における最上級の霊地だった。かつての聖杯戦争においてサーヴァントの侵入すら阻むほどであり、龍紋の影響を受けてなお、大聖杯の機能により霊地としてほとんど格を落としていない。

そして、白い化け物たちにとっても、この地は影響を無視できないものであるらしい。

凛と桜が辿り着いた時、侵入を躊躇うような様子で山の周囲を無数の化け物が浮遊していた。

このままでも、化け物たちは円蔵山に侵入しない可能性はある。

だが、それらがいつまでも小康状態が続く保証は何処にもない。それに、山の周囲を包囲されていては、せっかく士郎が逃がした人間が入ることもできない。

取るべき行動は決まっていた。

遠坂凛は、何事もやるからには徹底的にやる性質だ。

「計算ずくなんだか、それともただ執念深いだけなんだか……行くわよ、桜！」

「えぇ、いつでも行けます！」

化け物たちが気づく前に、二人は互いに魔力を活性化させる。

「――――Ａｎｆａｎｇ（セット）」

遠坂の魔術刻印が高速で回転を始める。

取り出す宝石は切り札の一つ、大粒のエメラルド。

封じた属性は風。込められた魔力の量は、かつての聖杯戦争時に用いたものより質も量も凌駕している。

「――――Drei（三番） Ein（蹂躙） Kreis（する） Blitz（雷帝の槌）……！」

砕けた宝石から伸びるのは、無数の雷の牙。

雷撃は放射状に展開し、化け物の身体を次々に射抜き消滅させる。

近づく敵は喰らい尽くし、遠ざかる標的も無慈悲に撃ち抜く。多対一の戦闘を目的に設計された魔術は、与えられた出番において十全以上の効果を発揮した。

華やかな宝石魔術の一方で、

「声は祈りに――――私の指は大地を削る……！」

間桐桜の魔術は静かに、だが一層容赦なく異形の数を削っていく。

桜の魔術特性は虚数。

間桐の魔術師としてではない、彼女本来の性質に依る魔術行使だが、凛と異なりまだ荒削りの面は否めない。桜はまだ魔術師としては五年の研鑽しか積んでおらず、使える魔術もそう多くはない。

だが状況によって、高めた一が他を凌駕することもある。

桜の足元から伸びる影から複数の腕が出現し、対象を掴んで引きずり込む。虚数空間に引きずり込まれた存在は、あらゆる情報が不確定であるその場所から逃れることもで

きず、やがて存在そのものを保てなくなり、虚数の海に埋没する。
虚数の世界は、存在するが実体を伴わない架空の空間。
故に、物質的な上限はなく、魔力が続く限り獲物を捕らえ、飲み込んでいく。
「――――――Ｓｉｅｂｅｎ（七番）　Ａｃｈｔ（八番）　Ｅｉｎ（灰）　Ｋ▪ｒｐｅｒ（は）（灰）（に）　ｉｓｔ（塵）　ｅｉｎ　Ｋ▪ｒｐｅｒ（は）（塵）（に）……！」
トパーズとルビーが投げ込まれ、密集し始めた化け物がまとめて灰に変わる。
今回、凛が用意した宝石は二十一。その内で切り札として準備していたのは五。
既に宝石十四、うち切り札の石を三も消費したが、灰が撒き散った後にもう敵の姿は残っていなかった。
「これで、残りは七、か……」
微かに眉を顰める。凛が想定していた以上に、宝石の消費が早い。
化け物そのものの強さは、大したことはなかった。一流以上の魔術師であれば十分討伐でき、二流以下でも全力で戦えば倒すことは難しくない。
だが、無数に現れる敵を殲滅するには、等価交換の原則がある限り、魔術師はあまりにも不利な立場に置かれる。何かを消費しなければ結果を得られないのが魔術であり、代償が尽きて魔術を行使できなくなった魔術師はあまりにも無力だ。
そして、凛がこれから行おうとしている試みは、残りの宝石を全て投げうつ可能性の

ある大博打。

――これ以上、宝石は浪費できない。

「桜、これから円蔵山の周囲に結界を張るわ。それから、わたしは大空洞に籠る。多分、しばらくは出てこれないでしょうね」

山のあちこちに仕込んだ宝石を確かめつつ、言葉を続ける。

元々、円蔵山には大聖杯を守るため、結界を張る準備を仕込んでいた。山の四方に一個ずつ、宝石を繋げた方形に接する円との接点に一個ずつ。

そして、その円に内接する方形の、各辺の中点に一個ずつ。計十二個の宝石を用いた、英霊の宝具すら引けを取らない大魔術。一度きりの魔術である反面、その効果は規格外である。

「だから、わたしが大聖杯を起動させて、あの白いのをどうにかするまでの間。あなたに、この結界を守ってもらう」

それは、使い切りの結界を、時間まで維持しろという無茶な要求。

元々この結界は、凛が遠坂邸から駆け付けるまでの間、他の魔術師を山の中に入れないためだけもの。言わば、大盤振る舞いの時間稼ぎでしかない。

それを維持するには、要の宝石に魔力を注ぎ続け、魔術を強引に成立させる必要がある。

並みの魔術師では、数分と持たずガス欠になる。膨大な魔術回路を持つ凛でも、一時間も持たないかもしれない。

「分かりました。ここは、わたしが守り切ります」

それを理解した上で、桜は答えた。

自分の力が信頼され、大切な役割を任された。

その事実が、桜の心を何よりも強く奮い立たせた。ならば、あとは姉の想いに応えるだけ。

妹の眼差しに笑みを返し、凛は力強く呪文を唱える。

「―閉―鎖―終―了―準―備―Das Schliesen.Vogelkafig, Schlie▪ung!」

遠坂に生まれた姉妹、それぞれの挑戦が幕を開ける。

――――冬木市周辺に巨大な晶柱が顕現するまで、あと一時間半余り。

第四話　あの日④

「……あれ、士郎……？」

声をかけられてハッとする。

視線の先に、見慣れた顔があった。不思議そうな瞳は士郎の顔から順に下がっていき、両の手の辺りで留まった。

干将と莫耶、二振りの短剣は士郎にとっては扱いなれた武装だが、ありふれた日常からは縁遠い――――忌避すべき殺し合いの為の凶器に他ならない。

「……、藤ね、え……」

迂闊だった。士郎は、自身の間の悪さを恨む。

冬木にいた頃、士郎は自身が魔術を使えるということを、知られないようにしてきた。それは、彼に魔術を教導した養父・衛宮切嗣の教えであり、聖杯戦争を迎えるまでは彼が魔導に携わるものであると知っていたのは、間桐の老翁と教会の神父くらいであった。

魔術を知れば、魔術の世界に接点を持つ。

いや。知らなくとも、近くにいるだけで巻き込まれる理由になってしまう。
それは、決して好ましい物じゃない。冬木という土地の住民が、大災害に巻き込まれたように。衛宮切嗣の養子となった士郎が、聖杯戦争のマスターに選ばれたように。一般人のはずの藤村大河が、魔術師のサーヴァントに人質として狙われたように。
だからこそ、この十年間。
士郎は、一度も冬木へ戻らなかったのだ。自分と関わらなければ、知ってしまう機会さえなくしてしまえば、自分のせいで巻き込んでしまうことはないだろうと。
あれだけ念を入れて立ち回っておきながら、自分のミスで台無しだ。
――――なんて、間抜け。
自身へ向けた苛立ちが、思考を凍てつかせ、停止させる。
表情を歪める士郎の想いとは裏腹に、大河は小走りに危なっかしく近づくと、ジトっと上目遣いで睨め付けた。
「……何してるのよ、士郎。こんな所に突っ立っちゃって」
「は？」
思わず、間の抜けた声が出た。
その反応がお気に召さなかったのか、ムッとした顔の大河はしつこく絡んでくる。
「駄目じゃない、こんな遅い時間に帰ってきちゃ。最近は落ち着いてきたけど、この辺り

物騒だったんだから、もっと用心しなさいよぉ……」
「いや、待ッ……、いてて、髪の毛を引っ張るな！」
「ほら、家に戻った戻った。びっくりよ、ちょっと寝てただけなのに、起きたらだーれもいないんだもの。大きな音は花火かしら、でもうちの方でそんな話聞いたかなぁ」
ふわふわと定まらない声音に、微かに漂ってくる酒精。
ふと、士郎の脳裏に、出かける直前の家の様子が過った。
テキパキと片付けの段取りを確認する藤村組の組員たち、空けられた大量のビール瓶、空の大皿たち、そして空き瓶を抱いて眠る酔いどれ虎……。
「……藤ねえ、まさか酔ってないか？」
「酔ってないわよー、酔ってないったら。トゥルリルルー、っと」
「いや、酔ってる。その鼻歌が何よりの証拠だ」
酔ってないわよー、と往生際の悪い虎の弁明を聞き流しながら、士郎は思わず息を吐く。
投影を見られてしまったのは致命的なミスだったが、少なくとも今この瞬間に詰問されることは避けられそうだ。士郎にはまだやるべきことが残っている、無駄にできる時間はない。
「藤ねえ。少し動くぞ、走れるか？」

「ん？　士郎、私を誰だと思っているのかね？　竹刀を握れば剣豪無双、冬木一の美人教師、藤村大河に死角はないわッ！」

盛大に啖呵を切られたが、その足元は覚束ない。

「……はぁーー、分かった。時間もないし、今回だけの特別サービスだからな」

「ん、んん？　おぉぉおおお……!?　士郎、あんたいつの間にこんな立派にッ!!」

「はいはい。ちょっと走るから、しっかり掴まっててくれよ」

横抱きに抱えられて、妙なテンションになる虎。

そのまま駆けだした士郎が異常な速度を出していることにも気づかず、微妙に呂律の足らない言葉を続ける。

「なんか感動ね。あんな小さかった士郎が、こんなにも大きく……」

「舌を噛むから、あんまり喋るなって。柳洞寺に着いたら絶対出るなよ、今外はだいぶ危ないんだからな」

「うーん……それは、フリ？」

「フリじゃないから!!　ここは大人しく待っててくれ、藤ねえ！」

突然、大河の動きが止まった。

訪れた静寂に、士郎の言葉も止まる。二人が黙ってしまえば、無人の住宅街に響く音はない。

強化された士郎の足が、舗装された道を駆け抜ける。途中で化け物に出くわすこともなく、山の麓も目前に迫った時、

「……ねえ、士郎。さっきの言葉について、お姉ちゃんから一つだけ聞きたいことがあります」

「うん、なにさ」

「士郎、ちゃんと帰ってくるのよね？　待っていたら、戻ってくるのよね？」

それは、交わさなければならない約束だった。

小さく静かな、けれども誤魔化しの利かない問いかけに、

「ああ……帰ってくるよ、必ず」

衛宮士郎は、欠片も迷うことなく頷いた。

数瞬後、未遠川の上を一つの影が通り過ぎた。

新都で行われる一方的な蹂躙は、間もなく、その攻守を入れ替えられることになる。

円蔵山の攻防も、今まさに佳境を迎えていた。

桜の額に汗が滲む。

結界の維持は、想像以上に彼女の魔力を奪い去った。彼女の行使できる魔術の程度

は、どれほど無理や無茶を重ねた所で、姉である凛に匹敵するのが限界である。これは桜の魔術回路の問題で、結界をフル稼働させればそれだけで手一杯になってしまう。

だから、彼女は小さな工夫を施した。

ほんのささやかな、思いつけば誰でもできるような工夫だ。それを実行できる度胸があれば、という前提付きではあるけれども。

「――――来た」

山中の宝石に手をかざしながら、桜は張り巡らせた監視の網に敵がかかったのを感じた。

土郎が殲滅したせいだろう、街の方角から来る化け物はほとんどいなくなったが、代わりに裏山から、気の遠くなるほどの攻勢が絶えることなく続いている。

今回は、二十弱の集団だ。姿こそ見ることはできないが、その位置は詳細に捉えている。

先頭の一体が魔術の防壁に喰らいつく寸前、

「声は遥かに――――私の檻は、世界を縮る……！」

立ち上がった影の腕は、十の化け物を飲み込んだ。

先頭の同族を喪失した化け物は、突如姿を見せた影の人型を警戒するように滞空する。影の人型はしばらくその場に在ったが、唐突に姿が掻き消える。

隙を突いて突撃を敢行した数個体は、魔術の防壁を砕けず弾き返され、再び伸びた影に捕らわれ、消失する。残った個体は形勢の不利を悟ったのか、無謀に挑むことなく撤退する。

ホッと息を吐く間もなく、次の集団が攻め立ててくる。

今度は三十余り。先の残存個体も合流し、その数は四十にも届くか。

「声は願いに――――私の影は、大地を覆う……！」

桜は再び、魔術の展開を変化させる。

結界は維持のみに努め、自身の魔術に魔力を集中させる。山の境界から広がる影は、全てが彼女の支配下に置かれ、使い魔へと変化した。

彼女の本来の魔術・虚数属性の特性魔術は、虚数空間に対象を取り込む魔術だ。そこに、間桐の吸収の特性が合わさることで、あらゆる存在を飲み込み、溶解し、魔力の糧として吸収する魔術へと変貌する。

生み出された魔力を充てることで、桜は辛うじて結界を維持し、防衛することに成功していた。彼女は、彼女にしかできない方法で、任された役割を全うしていた。

だが、均衡はいとも簡単に崩壊する。

桜の影は大地を覆い、近づくもの全てを把握し、飲み込んでいた。反面、結界に回される魔力は減少し、その機能は最低限維持されているに過ぎない。

桜の魔術の間隙に気付いたのか、はたまた不幸な偶然が起きたのか。
進化型の個体が一体、地中を潜行することで桜の影から逃れ、一切の妨害を受けないまま内部への侵入を成功させた。
森の中で浮上した進化型は、人々が密集した山頂部を目指して移動する。その道中、それは何かを感知して動きを止めた。
地中から響く、人間の域を遥かに超えた膨大な力の鼓動。
最古の英雄さえも賞賛し、人体という小宇宙を実際に宇宙とした特例、超抜級の魔術炉心。
進化型は、その魚のような体をよじらせると、再び地面へと潜り込む。
目的はただ一つ。
膨大な魔力を蓄えた冬木の大聖杯へ向け、侵入者は一直線に突き進む。

大空洞の天井から化け物が降ってきた瞬間、大聖杯の起動は寸前まで迫っていた。
小康状態にあった炉心に、火を投げ込んで稼働させる。
言葉にすればただそれだけのことなのだが、大聖杯ほどの炉心を動かすには、種火といえど生半な魔力では足りもしない。凛は宝石魔術を用いて長年溜め込んだ魔力を大幅に増幅させ、莫大な魔力を注ぎ込むことでようやく稼働にこぎ着けた。

だが、事態は切迫している。
大聖杯が動き出した、では遅すぎる。今すぐにでも本格稼働させないことには、冬木の滅亡は避けられない。
「――――だってのに、なんだってこのタイミングで……！」
悪態を吐こうが、状況は変わらない。
乱入してきた化け物も何かを察知したのだろう。これまでとは比較にならない勢いで、一人の魔術師へと襲い掛かる。
「――――Ｖｉｅｒ（四番）……！」
躊躇なく、唯一残っていた金剛石を投げ放つ。
最後に残った切り札の一、静止の魔術は巨大な化け物の突進を空中に押し留めた。込めた魔力の量からしても、あと数分は対象の動きを封じ込めるだろう。それだけあれば、宝石を用いずとも進化型を打ち倒せるかもしれない。
だが、それが何になるというのか。
「ああ、やっちゃった……」
呆然と、立ち尽くす凛の両手に宝石はない。今の攻防で、本当に使い果たしてしまった。
例え、この場を凌いでも、大聖杯が本格的に起動するのに半日はかかる。それまで、果

たして桜は結界をもたせることができるだろうか？　士郎は、無限に増え続ける化け物たちを相手に、戦い続けることができるだろうか？

答えは、否。

魔術師は、無限に戦うことのできる存在じゃない。どんな反則技を持っていても、人間を超えた力をふるうことができたとしても、それは永久ではない。もし、その原則すらも破れるのなら、もうそいつは人間を止めてしまっているだろう。

かつての相棒がいれば、らしくないと笑うかもしれない。それこそ、あのニヒルな笑みを浮かべながら、発破をかけるように小言を言ってくることだろう。

だが、現実は非情だ。

凛の手持ちに石はなく、魔力も足りない。大聖杯は寝ぼけていて、使えるようになる頃にはタイムリミットを大幅に超過している。

こんな状態で、どうしろというのか。

「――――――――あ」

……ある。手は、ある！

相棒――――脳裏を過った、赤衣の騎士の姿が逃避していた意識を引き戻した。

慌てて、首元を探る。指先に触れた硬い感触、それが鎖だと思い出すのと同時にそれは目の前に転がり出た。

赤い、紅い、大粒の宝石を用いたペンダントがそこにはあった。
遠坂の家に伝わる、百年物の宝石。これは、かつてそれを拾ったお人好しが、律儀にも元の持ち主に返してきたものだ。聖杯戦争が終わってから、絶えず身に付け魔力を込め続け、すっかり意識の外にあった切り札の中の切り札。

「……ありがとう。助かったわ、アーチャー」
もう忘れるな、とかつて言われた言葉を思い出す。
握りしめた宝石からは、信頼に足る重さが返ってくる。込めた魔力は十分以上、宝石の質も申し分ない。
「さあ、これで正真正銘、今のわたしの持つ全て。出し惜しみはしない。その代わりに、きっちり仕事はしてもらうから」
火が灯る。宝石の中で流転していた魔力が活性化し、与えられる命令を今か今かと待ち構えている。
魔術刻印も派手に魔力を吐き出させている。この一手、起爆剤ともいうべき干渉がうまくいかなければ――――いや、もう失敗した時のことなど考えるな。
「う、ご、けぇぇぇぇぇぇ……ッ!!」
もはや疑うべくもない。

十分な火種を投げ込まれ、煽られた魔術炉心は、今や完全に稼働を果たした。
準備はこれにて終わり、過程を省略する願望器を扱う上で後は具体的な結果の形を提示してやればいい。

変化は、唐突に起きた。
「……え？　そんな、逃げられた!?」
桜は、捕らえていた化け物たちが突然消失したのを感じた。
虚数空間で融解されていた個体も含め、全ての化け物が前触れもなく消えたのだ。即座に結界へ魔力の比重を傾けるが、
「これは、一体どういう、」
「――――桜、お疲れさま」
木に寄り掛かり、疲労困憊な凛の様子で、桜は辛うじて彼女の作戦が成功したことを悟った。
「上手くいったみたいでよかったですけど。何がどうなったんですか？　今の」
「あぁ、転移魔術で街にいた白いの全部追い出させたのよ。もちろん、それだけじゃまた侵入してくるだろうから、もう一つ手を打ったけど……、ってうわ!?」
意味ありげに笑う表情が、親の仇でも見るように豹変した。

ポケットから取り出した携帯電話――――旧式のいわゆるガラケーと呼ばれる機器を、取り出したまま停止する。振動していることから着信しているのだろうが、

「……、……ッ」

「あの、姉さん？　出なくていいんですか、電話」

桜が促しても、凛の手は携帯を握りしめたまま。

無言のまま、静かに葛藤していた彼女だったが、結局ため息と開くと通話ボタンを押した。

「……もしもし、士郎？」

『よかった。電話に出られるってことは、無事に終わったんだな』

……通話は、何故かスピーカーで行われていた。

桜としても、士郎の無事が確認できたのは嬉しいのだが、ガラケーでスピーカー機能を使う姉の姿に一抹の不安を覚える。士郎の安否を気にしているだろう彼女に気遣って、ということだろうか。

……どうも、そうでない気がして仕方がない。

『それで、何なんだ、アレ』

「なにって――――結界よ。せっかく願望器を使うんだもの、思いつく限り一番強力なのを用意したから」

☆　☆　☆　☆

『せっかく願望器を使うんだもの、思いつく限り一番強力なのを用意したから』

なるほど、そういうことか。

新都の外れ、教会の裏手にそびえたつ鉱石の塊を見上げながら、士郎は納得していた。

なるほど。確かに、遠坂らしい魔術だな、と。

「……すごいな。これ、時価に換算するとどのくらいになるんだ？」

『さぁ。わたしはただ、あの白いのが入ってこれないだろう魔術をイメージしただけ。用意するのは大聖杯なんだから、世界中の宝石がかき集められていても不思議じゃないわね』

それは、六本の巨大な円柱だった。

透き通るような水晶の中に、蠢く赤や青、色鮮やかな無数の軌跡。

高さ五百メートル、直径は百メートル弱といった寸法だろうか。その全てが宝石で構成されていることを思うと、脳裏に浮かぶ天文学的な数字だけで眩暈がする。

結界を維持する魔力も、大聖杯の方から引っ張ってこれるという。さすがに抜け目がない。

『――――それで、これからについて話し合いたいんだけど。士郎、戻ってこれる？　無理そうなら、こっちから新都の方に向かうけど』

「いや、大丈夫だ。少し休んだら、こっちで助けた人たちと柳洞寺に向かうから」
二言、三言と交わして、通話を切る。
ほう、と張り詰めていた緊張を緩めると、士郎の身体はあっけなく地面に転がった。
あまりのんびりはしていられない。
教会には、彼が保護した人々が息を潜めて待っている。数はそう多くないが、彼らを説得し、深山町まで移動してもらうのには相応の時間がかかるだろう。
その後、凛と、おそらく桜も含めて、今後に向けた話し合いもしなければならない。
やることは山積みだ。
それでも、何とか乗り切ることはできた。
「見てろ。今度は、取りこぼしたりしないからな」
誰に言うでもない決意は、正真正銘彼だけものだ。
遠い過去、かつての大災害で救われるしかない存在だった。
十一年前、未来の自分から、自分の信じるものの真贋を突き付けられた。
そして今、自分の力では助けることのできない命があった。
今度こそ、誰も失いはしない。大河も、桜も、凛も、生き残った人々を一人だって、あんな化け物たちに奪われてたまるものか。
その決意を胸に、士郎は弓を引き続けた。

二年の歳月を経た今も、冬木の守護者は新たな犠牲を拒み続けている。

遠坂家の地下。

二年前の襲来の際、手酷く壊されてしまった上の屋敷とは違って、魔術工房は無傷のままだった。

「……む、……むむむ？　いまいち上手くいかないわね……」

通信用の魔術礼装を弄りながら、凛はぶつぶつと文句を呟く。

ああでもない、こうでもないと試行錯誤を繰り返していたが、ようやく落ち着いたのか居住まいを整えると礼装を起動させた。

「もしもし――――ええ、聞こえています。すみません、少しばかり通信の準備に手間取ってしまって。元気そうで何よりです――――乃木さん」

第五話　タイム・リミット①

二〇一七年十二月八日。
昼下がりの丸亀城。
仲間たちと昼食を済ませた後、乃木若葉は放送室にいた。
そこは無骨な無線機が固定された机、そして折り畳みの椅子が一脚あるだけの部屋。
毎日利用している若葉も、通信を行う以外にこの部屋を使用したことはない。
彼女は、慣れた手つきで無線機を操作する。
スイッチを入れ、隣のダイヤルを微調整していく。やがて通信が繋がると、暫く雑音が続き――――
「……またか」
向こうの調整不足だろう。雑音を吐き続ける機械を前に、若葉は思わずぼやいた。
そのまま、待つこと一分間。
『――――もしもし、』
「聞こえています、遠坂さん。香川より、乃木です」

『ええ、聞こえています。すみません、少しばかり通信の準備に手間取ってしまって』

聞こえてきた女性の声に、いつも通りのやり取りを交わす。

通信相手の彼女――――遠坂凛は、九州の冬木市における唯一の窓口だ。

「勇者」のいない冬木の地で「巫女」に似た役割を担っているという女性。幾度となく通信を行っている若葉もまだ、彼女の人となりを捉えきれていない。

『元気そうで何よりです、乃木さん』

「ありがとうございます。遠坂さん、そちらの状況はどうですか?」

『相変わらずですね。いつも通り、やってきた化け物を追い返して、破られた結界を修復して終わり。強いて言えば、接触から侵入までの時間が少し早くなっているかもしれない』

「……適応しつつある、ということですか」

『わたしたちもそう考えています。結界のパターンを変質させることで、後続を断つことには成功していますが……』

あまり、芳しくない状況なのだろう。

凛のうんざりとした声音に、若葉は冬木の状況を思い返す。二年前のあの日から一度も侵攻を受けていない四国と違い、諏訪と冬木は連日戦いを強いられているという。

特に、冬木には勇者も巫女もいないと聞く。

土地神の加護も受けられず、人の力のみで抗うことがどれだけ困難であるか、若葉は身をもって知っていた。彼女に勇者の力がなければ、親友であり巫女でもある上里ひなたがいなければ、二年前のあの日を生き延びることはできなかっただろう。

それを思えば、冬木が今もなお残っていること自体、奇跡に近いのかもしれない。

『こちらはそんな所です。四国は何か、変わったことはありましたか？』

「いえ――、特にありません」

胸にざわめく小さな罪悪感を、若葉は無視することができない。

四国は平和だ――――少なくとも、この二年の間は。

連日、バーテックスからの襲撃を受けている冬木と諏訪に比べ、不気味なくらい何事もない日々が続いている。勇者である若葉も、バーテックスと刃を交えたのは一番初めの襲来の時だけで、以降は他の四人の勇者たちと訓練を行う程度だ。

最大の戦力を抱えておきながら、苦境に立たされているのは諏訪や冬木ばかり。

若葉は、それを仕方がない、と割り切れる人間ではなかった。

『そうですか……ところで、この前話した件について、大社の方から回答はありますか？』

「……いえ、何も。すみません」

そうですか……、それは残念です。

雑音交じりの声音は、あまり気にしていないように聞こえた。
通信相手が気にしないように振舞っているのか、それとも本当に気にしていないのか……若葉には、どちらか判別がつかない。正直、自分よりひなたの方が通信相手として適任ではないかと、若葉は常々思う。
『まあ、こちらも切迫している訳ではありませんし。次の通信の時にでも』
「分かりました。大社の方にも、私からもう一度お伝えします」
再度の確認を約束して、若葉は通信を切った。
時計を見ると、まだ三十分も経っていなかった。予定では、冬木との通信に一時間ほどの時間を設けてはいるのだが、その時間が使い切られたことはない。
若葉としては、諏訪との通信のようにもっと打ち解けたやり取りをしたいのだが、
「……そう、上手くはいかない、か」
カリカリ、とダイヤルを弄る。
相手が年上、というのもあるのだろう。通信の内容が、情報の共有ばかりなのも原因かもしれない。
週に二度、定期で行われている冬木との通信は、一年の間に若葉にとって大きな悩みの種になりつつあった。

放課後、若葉は再び放送室を利用していた。

『……えっと、冬木との通信を、もっと気軽な雰囲気にしたい、ですか？』

「そうなんだ。その、白鳥さんとの会話のように気兼ねなく、とはいかないかもしれないが……」

毎日の日課になっている諏訪と四国の「勇者通信」、その相手である諏訪の勇者・白鳥歌野は、通信機越しに考え込むような唸り声を上げた。

若葉がこうして彼女に悩みを打ち明けるのは、初めてのことではない。自分の仲間が抱えている不安や協調関係の課題、勇者としての在り方など、状況報告の後に交わす雑談の中で時折相談に乗ってもらっていた。

暫定的ではあるが、若葉は四国の勇者の中でリーダーの役割を担っている。

同年代の仲間として、軽口を交わすことのできる歌野との関係は、今の若葉にとってかけがえのないものだ。彼女との関係があるからこそ、冬木との繋がりも大切にしたいと思うのは、自然なことなのかもしれない。

歌野は、しばらく唸り続けた後、

『そうですね。若葉さんの場合は一度、気軽に会話をしよう、という目標から離れてみるのがいいかもしれないですね』

自信ありげにそう提案した。

ピンとこなかったが、手詰まりの状態で代案が浮かぶわけでもない。若葉は大人しく先を促した。

「……しかし、それは、少し本末転倒じゃないか？」

『いえ、そんなことはないと思いますよ』

いいですか、と言い聞かせるように歌野は語る。

『若葉さん、私とあなたが今の関係になるまで、どんな話をしてきたか覚えていますか？』

「どんな話？　……そうだな。互いの状況報告に、私からは授業や訓練での様子を、白鳥さんからは畑仕事の話をよく聞いたと覚えている。それから、いかにうどんが素晴らしい食べ物かを、」

『いいえ、蕎麦がいかに優れているか、の間違いです』

……互いに譲れない領域を再確認しつつ、歌野が軌道修正を図る。

『えっと、つまり私たちは、互いに話したいこと、聞きたいことを会話の中で出し合ったんです。今なら、私は若葉さんがどんな人なのかだいたい分かるようになりましたし、それは若葉さんも同じでしょう？』

「ああ――――そうだな」

『冬木の遠坂さんとの通信も、同じことだと思います。若葉さんの方から、遠坂さんに聞

いてみたいことをぶつけてみるのもいいんじゃないですか？』

なるほど、と今度は納得がいった。

いつも、若葉の方から世間話を持ち掛けても、そつなく返されてしまっていた。だが、向こうの内容に関係することなら、情報の共有も兼ねて答えてくれるかもしれない。

そこから、会話の起点になれば、自然と話も弾むだろう。

駄目ならまた、別の話題を見つければいい。

「ありがとう、白鳥さん。何とか、次の通信へ向けた方針が定まりそうだ」

『いえいえ、それでは若葉さんの悩み事も解消された所で、いつもの勝負を、』

「ああ、今日こそは決着を、」

普段通り、苛烈な論争を繰り広げようと高まった二人の熱意に、校内に響くチャイムが水を差す。見れば、時計の針がタイムアップを告げていた。

「……すまない、思った以上に付き合わせてしまったようだ」

『気にしないでください。明日の通信までに、長野の蕎麦の素晴らしさを納得させられるようなプレゼンテーションを準備してきますから』

「なるほど、ならばこちらもうどんのために、万全の態勢を整えるとしよう」

『明日の通信が楽しみです。では、これで。四国の無事と健闘を祈ります』

「諏訪の無事と健闘を祈ろう」

不敵に笑い合い、通信を切る。
手早く片づけを行い外に出ると、幼馴染が壁に寄り掛かって立っていた。
「お疲れ様です、若葉ちゃん。諏訪はどうでしたか？」
「ああ、特段大きな変化はなし、だそうだ」
その言葉に、ひなたは安堵の表情を浮かべる。
若葉たちにとって、諏訪は自分たち以外の勇者がいる唯一の地だ。気にならないはずもなく、彼らが無事なことは朗報以外の何物でもない。
「よかった。今日は、大きな侵攻もなかったんですね」
「小型の襲撃は一度あったらしいが、それもすぐに蹴散らせたと言っていたな。春の準備の邪魔をされてストレスフルだと、彼女は憤慨していたが」
笑いながら、歌野との会話を思い返していた若葉だったが、不意に小さな疑問が生じた。
「――――そういえば、冬木はバーテックスの襲来をどうやって防いでいるんだろうな」
「冬木、ですか……？」
ひなたの確認に頷く。
時々、思考の海に浮かんできては、深く考えてこなかった疑問だった。
「えっと、確か結界を張っている、という話じゃありませんでしたか？」

「そうなんだが、その結界も近頃はよく破られ、侵入されることも珍しくないらしい。それで、侵入してきたバーテックスを、一人の人間が追い返しているらしいんだが……」

ここが本題だ。

若葉は、ごく当たり前な疑問を口にする。

「一体、どうやって追い返しているんだ……？　冬木には、勇者は一人もいないはずなのに」

「確かに、考えてみればそうですね」

二人は、揃って首を傾げた。

大社からは、バーテックスは勇者や、勇者の用いる武器以外では傷つけることもできない存在だと聞かされている。それは近代火器も例外ではなく、実際に自衛隊の兵器ではバーテックスの一体も倒すことは叶わなかった。

だというのに、勇者でもない人間が、たった一人でどうやってバーテックスに対抗しているのだろうか？

「例の、遠坂凛さんが何かしているんじゃないですか？　大社の話では、彼女が結界を張ったと言っていましたし」

ひなたの推測を、若葉は頭を振って否定する。

「いや、あの口ぶりは彼女自身のことを話している、という感じではなかったと思う。多

分だが――――彼女とは別に、勇者の役を担う人物がいる」
はっきりと意識すると、勇者の代わりをしている人間に興味が湧いてきた。
一体、どんな手段でバーテックスと戦っているのか。
年上なのか、年下なのか。男性なのか、女性なのか。武闘派なのか、頭脳派なのか。柔和な性格なのか、粗暴なのか、冷静なのか。色々な人物像を思い描いては、消していく。
これは、いい話のきっかけが見つかったかもしれない。
「そうだな……今度の通信の時に、遠坂さんに聞いてみよう。もしかしたら、私たちの訓練や戦術を発展させられる情報を教えてもらえるかもしれない」
「確かに、もしかしたら勇者にならなくても、バーテックスと戦える方法があるのかも知れません。そうなれば、人類側の戦力は一気に膨れ上がりますし」
ひなたの同意を得られたことで、若葉の方針は定まった。
――――必ず、このきっかけをものにしてみせる。
四国の勇者は、静かに決意を固める。

同時刻、冬木市の遠坂邸。
遠坂凛は、一向に繋がる様子のない通信用礼装を前に立ち尽くしていた。

「……信じられない」

目の前の事実が受け入れられない。

しかし、状況は明確な答えを指し示している。疑う暇があるのなら、次の行動を取るべきだ。

凛は己の疑心を振り払うと、苦手にしている携帯電話を手に取った。

操作に迷いはない。この二年、同じ操作を繰り返していれば、筋金入りの機械音痴も一工程（シングル・アクション）くらいはものにできる。

「――――士郎、聞こえる？」

コールは二回。

スピーカーをオンにして、凛は判明した事実を告げる。

その声は、驚愕と焦燥、疑惑……そして、畏怖によって震えていた。

「魔術協会が――――時計塔が、落ちたわ」

冬木の大聖杯のリミットまで、あと三ヶ月。

第六話　タイム・リミット②

二〇十七年十二月十二日。
時刻は午前四時。
冬という季節を考慮すれば、まだ夜といっても問題はない時間帯。だが、人外の化け物相手に、人の理屈は一切通用しないらしい。
「……、閉じたか」
水晶の柱の上で、士郎は静かに矢を番える。
結界への接触から、僅か十分足らず。
破られた結界は再構築され、退路と増援を断たれた侵入者と冬木の守護者との戦端が開かれる。
周囲は闇、魔力で強化した視力でも一筋の光も見通せない漆黒の世界。いくら士郎でも、この暗闇の中では標的を見つけることすら困難だろう。
放たれた矢は、実際何も狙っていなかった。
ただ放たれただけの、狙撃としては落第でしかない一矢。炎を宿した矢は、何にも妨

げられることなく大気を引き裂き、

「――――――弾けろ」

瞬間、現れた爆炎の火球が赤々と、周囲の闇を拭い去った。

照らされる標的。弓兵の鷹の眼は、その数と場所を一つたりとも違えず把握する。

此度の侵入者は、数にして百を超える。

ほとんどは小型、その中で目につく進化型の巨体が八。

その全てに射掛ける軌跡、狙い通りに射抜くイメージを明確に描く。

「――――――投影（トレース・オン）、開始。工程完了（ロールアウト）、全投影待機（バレット・クリア）」

呪文を唱え、創り出された剣を弓に番える。すぐさま形を変えたそれは、もはや剣ではなく矢と呼ばれる類のものだ。改造された矢は今度こそ、必中の狙いのもとに獲物へと疾走する。

「――――――停止（フリーズ・アウト）、解凍」

二の矢を番えるのに、時間にしてコンマ半秒にも満たない。

放った一射が敵に中るまでの間、刹那に引き絞った第二射、第三射が放たれる。

矢筒から取り出す工程を省略し、弦の振動さえ利用し繰り返される必中の掃射。まさに絶技と言って差し支えない衛宮士郎の射撃は、化け物たちを次々に縫い留める。

五十を過ぎた頃、爆炎が消失した。

明かりが消えてなお、狙撃の雨は止まらない。小型の標的を撃ち尽くし、進化型の二個体をハリネズミにしたところで、ようやく化け物に変化が生じた。

「ほう……少しは、学習したらしいな」

前衛にあたる位置取りをした進化型から、半透明の板状組織が展開される。

士郎も初めて見る変化だが、直前までの殲滅劇を考慮すれば、あれが狙撃への対策なのは推測できる。問題は、あれが単純に盾のような役割を果たすものなのか、あるいは別の効果を持っているのかだが。

同時に、後方へ退がった三体の棒状個体が、バネのように身体を収縮させた。

その狙いは明らかだ。前衛が狙撃を防ぎ、後衛が位置の判明している間抜けな狙撃手を撃破する。外したところで後方は人間の住む領域であり、どちらにせよ、人間をより多く殺すという化け物の目的は達成されるだろう。

「――投影（トレース・オン）、開始。体は、剣で出来ている……！」

だが、それを許す士郎ではない。

投影されるのは、赤原猟犬（フルンディング）。

北欧の英雄が振るったとされる、伝説の魔剣である。その剣を矢と変え、番えて狙うは前衛の中央――板状組織の中心点。

矢に魔力を注ぐ。ただの射撃では、それに対抗する為に生み出されたあの壁は打ち破

れないのだろう。故に、確実に撃ち抜くため、乱暴に十分以上の魔力を叩き込む。
五秒、限界まで引き絞った弦が、ぎちりと軋む。
十秒、敵の身体が一層収縮し、力を溜め込んでいく。
十五秒、冷却された意識が、一瞬の変化を読み取った。
矢を放つ寸前、大気を割って後衛の一体が士郎へ向かい、襲い来る。
指は、既に矢から離れつつあった。
もはや標的は変えられない。弦から放たれた緋い魔弾は、
「赤原を往け、緋の猟犬……ッ！」
軌道が変わる。
違う、初めから狙っていた標的は二つだっただけのこと。
法則はねじ切られ、魔弾は正面から白い巨体を粉砕する。そのまま、駆け落ちる流星は第二の目標へと迫り。
轟音が響き、板状組織に無数の亀裂が走った。
射撃に対する最適解として創り出された防壁は、多少なり威力を削がれていた魔弾を相手に、辛くもその役を果たしきった。
衝突した矢は反転し、射手の下へと還っていく。迎撃も間に合わない、音速を超える速度が放った射手自らに牙を剥く。

手はない。今から投影したところで、着弾が先を行くだろう。
そもそも、士郎は防ぐ手立てなど考えていない。
「――――投影（トレース・オン）、終了。我が骨子は、捻じれ狂う……」
次弾を装填。弓を構える弓兵の眼に、目前に迫る魔弾など映ってもいない。
先の魔弾は、赤原猟犬（フルンティング）。
射手が健在である限り、狙う意志が消えぬ限り、幾度防がれようと標的を狙い続ける。
故に、反射されたところで問題などない。
「偽・螺旋剣（カラド・ボルグ）……ッ!!」
翻る緋き魔弾は、今度こそ標的の盾を打ち砕き、その持ち手を粉砕する。
そして、新たな標的の無防備な側面に喰らいつく前に、次なる一撃が放たれた。
新たな魔弾は大気を捻じ切り、先の一撃を反射させた防壁すら歯牙に掛けず、
二体の化け物を、紙でも貫くように穿ち抜いた。
殲滅を終え、士郎は投影した宝具を消滅させる。
怪我はなく、魔力の消耗も問題ない。
とはいえ、今の士郎は大聖杯とのパスから、膨大な魔力が得ることができる。彼が抱えていた魔力の問題は、ほとんど解消されていた。
「先週に比べて、小型も進化型も、かなり数が増えてきたな……」

その変化が何を意味するのか、士郎はもう答えを知っている。
先日の時計塔陥落、連日続く大規模な侵攻、急激に増した敵の戦力、
「分かりやすいな――――次は、ここを落とすつもりってことか」
携帯から新たな警報音が鳴る。これで、日が変わってから十三度目の侵攻だ。
音色の違いから方角を把握し最短で迎撃すべく、人影は薄闇の空を舞う。

守護者の奮戦を以てしても、喰い破られた穴は塞ぎきれない。
不運だったのは、化け物どもの目的が士郎ではなかったことか。あれらは、人間を殺すことを目的としているが、本能に従い動いているだけの獣でもない。
進化体ですら屠る守護者は、化け物にとっても厄介な存在だろう。
だが、それ以上に目障りなのが、この都市全域を覆う結界――――破るたびに変質し、侵入を制限する魔術の防壁。
故に、あれらが目指すはその根源。
大聖杯の眠る円蔵山へと、狙撃手の眼を逃れた侵入者は殺到する。運の強い一が、他と合流して五となり、いつしか十を超えた集団がいくつも霊山の麓に辿り着いた。
あの忌々しい弓兵も、化け物の狙いに気づいているかもしれない。
だが、既に状況は、士郎一人の手には余るものになっていた。山の一団を排除する隙

に、今度は幾つかの百の侵攻を許す羽目になる。拮抗している戦線は後手へと追いやられ、いずれは封殺されてしまう。

「――――言葉は刃に、私の影は大気を阻む……！」

だが、それは士郎一人で対処をした場合の話だ。

円蔵山の周囲に屹立する黒い影。その身体に触れればどんな結末が待ち受けているか、知識を共有している化け物たちは侵入を強行することができないでいる。

御山へ上る階段の前、影を従えた桜は姿形を変えていく敵をまっすぐに見据えた。

「ここから先は、通しません――――志は確かに、私の影は剣を振るう……！」

歌う声は従僕を繰る。

直後、地面から影に拘束された巨体が躍り出た。

魚の姿をした、地面を潜行できる進化型。無慈悲な触手は、獲物を覆い包むと虚数の海に埋没させる。

「は――――ぁ、は――――ッ！　く、このぉ……ッ！」

怯む様子すらなく襲いかかる化け物を、影の巨人が喰らい尽くす。

桜の魔術は、化け物に対して有効だった。

虚数空間に囚われたものには、適応する間も与えられない。動くことも許されず、融解され、魔力として吸収される。

「……は、ぁ――――――、まだ、いける……ッ！」

大規模な侵攻が始まり四日。

大聖杯を護る桜も、既に限界は目前だった。

体力も尽き、魔力は生命を削り絞り出して補っている。どれだけ迎撃しても限りのない襲撃の嵐は、心をへし折るには十分なほど。

彼女が今なお魔術を行使できているのは、たった一つの決意から。

――――今度こそ、護り切ってみせる

色を失った唇で、血を吐くように呪文を紡ぐ。

気力を奮い立たせ、少ない魔力を活性化させる――――桜の奮闘はしかし、敵の脅威認識を引き上げるには十分だった。

化け物が密集していく。取り囲んでいた個体が融合し、複数の進化型が桜の前で生み出される。

その数、五体。

「ッ……!!　諦めて、たまるもんかぁあ……!!」

絶望的な戦力差に、四体の影で立ち向かう。

周囲に展開した影は消せない。

目の前の敵に集中して、一体でも侵入を許せば大惨事になる。柳洞寺に避難した人々

や、大空洞で願望器の制御に死力を尽くしている凛では、化け物に抗う術はないだろう。
決死の覚悟を決めた桜が、影たちを動かそうと口を開く。
「、……あれ？」
その一瞬前、矢を放とうとした進化型が赤い閃光と共に爆散した。
唖然としている間に、次々と白い巨体が撃ち落とされる。
来ることのできないはずの救援が、周囲の残党を一掃した。正確無比の射撃は標的を射殺し、降り立った弓兵は桜の姿に安堵の表情を浮かべる。
「悪い、桜。助けに来るのが遅くなった」
「い、いえ！　ありがとうございます……じゃなくて、どうして先輩がここに!?」
「結界が強化されたらしい。おかげで、どうにか余裕ができた」
そう語る士郎の息も上がっていた。
無理もない。魔力は無限に近くとも肉体は人間のままであり、動くほどに疲労は蓄積されていく。
「……ひとまず、なんとかなったな」
「そう、ですね。なんとか、護り切れました」
ホッと、互いに力を抜く。
新しい結界はよほど強固なのか、新たな敵が侵入してくる気配はない。

「それじゃあ、俺は一通り結界を見回ってくる。上で遠坂が待ってるだろうし、桜は先に行っててくれ」
「分かりました。先輩も、気をつけてください」
別れ際、桜の眼に映るのは新たな防壁。大聖杯が創り上げた、強力な魔術結界。
その壁も、いつかは破られるのかもしれない。
その『いつか』が遠い未来であることを願いながら、桜は階段を駆け上がった。

食料の確保、水源の増設、食料の確保、食料の確保、消耗物資の補充、食料の――――、
「ぐぅ……ッ！　必要経費、必要経費ってわかってるんだけど……!!」
「姉さん、落ち着いてください。その紙だって、タダじゃないんですよ?」
自分のまとめた報告書を引き千切ろうとする姉を、優しく現実を突きつけて諭す妹の図。
幸い、凛の暴走はすぐに収まった。
羽交い絞めにされたまま、握り潰した紙束にジトっと視線を送る。そこに書かれている情報は冬木周辺の分散霊脈への所感やこれまでの大聖杯起動の経緯、貯蔵魔力量の推移など、つまりは大聖杯の状況調査の結果である。

そして、その調査を行った本人が身悶えするほど、冬木の状況は芳しくない。
有り体に言えば、まさに崖っぷちだった。
「これまで通りに引きこもっても、一ヶ月が限界、か……よくもったと思うけど、いよいよじり貧になってきたわね」
一ヶ月――――――それは、大聖杯が今の結界を維持できる最長期間。
結界が一度も破られず、大聖杯の稼働を定期の食料確保や消耗物資補充などにのみにあて、いつもと変わらない日常が保証される生存猶予。
目前に迫るデッドライン。
超えた先にあるのは、今度こそ一方的な虐殺だ。
「そんなこと、させてたまるかっての」
「でも、本当に作戦あるんですか？　姉さん、さっきの会議で自信満々で言い切ってましたけど」
「……む。なによ、桜まで士郎と同じように疑ってるわけ？」
「はい、ほんの少しだけ、ですけど」
「……ぬぬぬッ」
非難の眼差しもどこ吹く風、にっこりと肩越しに笑う桜。
凛が何か言いかけ、止める。今の話題では分が悪いと思い直したのもそうだが、そろ

そろ予定の時間だと気づいたからだ。
「さて、と。それじゃあ桜、頼んだわよ?」
「大丈夫、こっちも準備できてます」
桜の手に握られたのは、凛の使っている携帯電話。
凛は頷くと、いつもの通信用礼装の前に座り、起動させる。
「――――Ａｎｆａｎｇ（セット）」
魔術回路をスタートさせる。
魔力を送り込まれた礼装は、すぐにその機能を果たす。
漂う細い線を手繰り寄せ、識別し、目当ての線だけを捉える。礼装間での通信であればそれほど時間もかからない工程だが、相手が現代機器となると勝手が違う。
だが、いつまでも泣き言を言っている訳にもいかない。
「――――捕まえた」
何度やっても慣れない作業を、いつもの半分ほどの時間で終わらせる。
雑音を吐き出していた礼装から、繋いだラインを通して少女の声が流れ出した。
『――――香川より、乃木です。これより通信を始めます』
「――――冬木より、遠坂です。元気そうですね、乃木さん」
いつも通りに挨拶を交わす。

普段であれば、そのまま互いの状況を報告し合い、通信を切り上げるところだが。
「乃木さん。状況報告の前に、少し質問してもいいですか？」
『え？　……いえ、すみません。私に答えられることであれば、お答えします』
そう、ここからが勝負所。
慎重に、冷徹に、魔術師としての遠坂凛が口を開く。
「同室している、あるいは――――通信を聞いている大社の方がいるならば、少しの間だけ代わっていただけますか？」
『な……ッ!?　遠坂さん、それはどういう意味だ！』
若葉の激昂も無理はない。
四国と冬木の通信において、いくつかの約定が交わされている。
その中の一つ、大社から出された項目として『当通信において、第三者の立ち合いを行わない』というものがあった。凛の発言は、大社が自ら申し出た取り決めを無視していると指摘し、更には四国側の不信を滲ませたに等しい。
若葉の反応からして、彼女の周囲に他人はいないのだろう。
だが、傍受の有無までは証明できない。たとえ若葉からの心証を害してでも、凛には大社を交渉の場に引き出す必要があった。
「冬木の現状は切迫しています。これ以上、待つことはできません」

『待ってくれ、遠坂さん！　先週までに聞いた話と違う、まず順を追って説明を、……な、に？』

ドタバタと、突然通信の向こうが騒がしくなった。

聞き覚えのない声と若葉の非難する声とが朧気に聞こえる中、低くはっきりとした男の声が礼装から流れ出る。

『……はじめまして、遠坂凛さん。勇者に代わって、私が話を聞きましょう』

「ようやく出てきたってわけ。それで？　あなたは、一体どこの誰なのかしら？」

『大社に勤めている、三流どころの呪術師ですよ。名前の方は、ご容赦いただけますか？　呪いをかけるのは得意ですが、解くのはとんと苦手でして』

飄々と答える声が、凛の神経を逆撫でる。

だが、大社を名乗る人間をようやく引き出せたのだ。今回は、これで良しとしなければ、せっかくの機会を不意にしかねない。

焦げ付くような苛立ちを押さえつけながら、彼女は本題を切り出した。

「冬木の現状についてだけれど、大社はどこまで知ってるのかしら？」

『……具体的には、何も。ただ、ここ数日の間諏訪への侵攻が不自然に消えたことから、冬木が大規模な侵攻を受けているだろうとの推測は立てていました』

『馬鹿な……そんな話、私たちは聞いていない……！』

『あくまで、推測でしたので。必要になれば、追って伝達する予定でした』

若葉の糾弾を、男は淡々とした声で躱している。

暴れる音が聞こえないのは、若葉が自制しているのだろう。いくら大人と子供とはいえ、本気で暴れる人間を生身で拘束するのは容易ではない。相手が、戦闘訓練を行っているのならなおさらだ。

「噂通りの組織のようね。あの時計塔まで、あなたたちの悪評は届いてたわよ?」

『それは光栄ですね……それで、冬木はどんな状態なのですか?』

暖簾に腕押し、糠に釘。

軽口を収めた凛は、本来の目的に集中する。

「侵攻を受けていたのは事実よ。期間は、前回の通信後から今日の朝まで。新たに結界を構築してからは侵入を許していないけど、いつまでもつかは正直分からない」

『……今の話だけならば、そこまで切迫しているに思えませんが。別の問題ですか?』

「ええ。魔術炉心の方が限界寸前、新しい結界を構築したあたりで完全にガス欠よ。冬木は、あとひと月も結界を維持できない」

『なるほど。それは大変だ、我々大社を強引に引き出した理由も納得できました』

躊躇なく、凛は自分たちの弱みを曝す。

今回の交渉で重要なのは、冬木が限界だと認識させることと、冬木側の持つ特異性を

相手に有用だと認めさせること。

前者については、ほぼ果たしたといえるだろう。

ならば、残るは後者――――――ここからが本当の交渉になる。

「それで、さっそくで悪いのだけれど、三カ月以上前に伝えてもらった要望について、回答をもらってもいいかしら？　当然、今この場で」

『えぇ、どうぞ？　といっても、数日前にようやく回答がまとまったので、今日の通信の最後にでも伝えてもらうつもりだったのですが』

事前に送っていた要望は、五項目。

その一つひとつを確認していく。男は、言い訳のような言葉を裏付けるように、ぼかすことなくそれぞれに答えを返した。

一：四国には現在、他地域の人間を受け入れる余裕があるか。

Ａ：通信で把握できている人数程度であれば、問題なく受け入れられる。

二：四国の結界を、部分的に解くことは可能か。あるいは、魔術による転移を阻害しないよう組み替えることはできるか。

Ａ：結界は神樹によって作り出されたものであり、人間の手で自由に組み替えられるものではない。ただ、嘆願によって、結界の一部を物理的に開くことは可能である。

三：四国の勇者を護衛に出すことはできるか。

A：彼女らは実戦経験に乏しく、四国の防衛も考慮するに、あまり長距離を移動させることは大社として容認できない。

四：大社に魔術師はどの程度所属しているか。

A：百程度だが、ほとんどは三流にも満たない呪術師まがいの者たちであり、魔術協会などに所属するような一流のものはいない。

五：瀬戸大橋は崩落していないか。

A：使用はできないが、崩落の危険性もないと考えている。

『……回答は、以上でよろしかったでしょうか？』

「ええ。それにしても、魔術協会からも警戒対象にされていた組織の内情が、そんなものだったのは驚きだったわ」

『過剰な評価です。我々は、根源さえ目指していなかったのですから』

男の言葉に、思わず凛は眉を顰めた。

魔術師とは根源を目指し、その手段を模索する存在だ。それが集まってできた魔術組織が根源を目指さないなど、信じられるものではない。

そして、根源を目指さない異端な魔術組織など、魔術協会に目を付けられないはずがない。危険性ではなく、異常性から警戒対象に指定されていたのだろうか？

「十分あり得るわね……」

『？　何の話です？』
「独り言よ、それで――――――こちらからの提案が、ひとつあるわ」
『ほう、なんでしょうか？』
　男の声に興味の色が浮かんだ。
　それを見逃さず、凛は即座に畳みかける。
「今日から一週間後、つまり十九日に、わたしたちは冬木を捨て、四国への脱出を計画している。その時に、四国側にはわたしたちの受け入れと、勇者による援護を要請するわ。対価は、大社への所属と協力、それと――――――勇者の教官なんて、どうかしら？」
「え、えぇ……ッ！　それっt……むぐッ！」
　大声を出しかけた口を手で塞ぎつつ、反応を窺う。
　教官の件は、既に士郎も了承済みだ。中東で活動していた頃に経験があると言っていたが、詳しいことは凛にも分からない。ただ、四国の増強戦力よりかは危険性が低く、かつ勇者たちの戦力も上がるのなら問題はないはずだ。
「どうかしら、これでもまだ足りない？」
『いえ――――――十分です。次の通信で、計画の詳細を提示してください。大社も、冬木の脱出をできる限りサポートします』
「そう、なら今日はこの辺りで。準備が多すぎて、人手がまるで足りてないものだから――

――――――、はぁ……ぁ」

通信が切れる。

凛は大きく息を吐くと、身体を伸ばしつつ立ち上がった。

「それで。士郎からは何か、返信あった？」

「うーん、まだなにも……あ、一通だけ来てます」

桜がメール機能を使って、受信したメッセージを開く。

そこには、藤村組と協力して準備を進めていくこと、そして夕方から脱出に関する説明を柳洞寺で行うと決まったことが書かれていた。

おそらく、桜が送信した通信の概要を基に、会議を進めていたのだろう。こうした時、藤村組の繋がりの深い士郎の存在は非常に大きい。

「ふむふむ。なるほど、よくもまあうまくまとめたものね」

「そうですね、もう少し会議は長引くかと思っていました」

顔を合わせて、笑い合う。

ここまで順調だ。あとは、成功させる為に準備をしていくしかない。

「よし――――――じゃあ、やるわよ桜！」

「はい、姉さん！」

冬木脱出まで、あと七日。

そして同時刻、彼女も動いていた。
通信の後、大社からの説明は一応あった。
冬木の推測された現状から通信を傍受していたこと、諏訪との通信は一切盗み聞くようなことはしていないということ、要望への回答がここまで伸びてしまったこと。
話を聞いてなお、若葉の内心では苛立ちが渦巻いていた。
一つは大社に対してだが、もう一つは自分自身に対して。
何事にも報いを。それが乃木の生き様だ。
ならば――――過ちを犯した自分は、大社は、何ができる？
何をすればいい？
「……答えは、一つしかない……」
教室の扉を開ける。
まだ昼休みの最中、教壇の前に立った若葉は五人の仲間たちへ顔を向けた。
「少し、いいだろうか。皆に、聞いて欲しい話がある――――、」

こうして、運命は流転する。

せめて、彼らの未来にささやかな、けれど確かな幸福があることを……

第七話　タイム・リミット③

二〇十七年十二月十七日。

丸亀城敷地内に、いくつもの声が響き渡る。

「――――郡さん、左後方の警戒をお願いします！」

「分かったわ――――、――――甘い」

硬質な音が響く。

郡千景の振るう鎌が、飛来した矢を弾き飛ばしたのだ。もっとも、矢は先端にゴム製の保護材が付けられているため、刺さって怪我をすることはない。

即座に射手を探す千景の後方から、新たな攻撃が放たれた。

縁を先ほどの矢と同じ、ゴムの保護材のカバーで覆った旋刃盤が、高速で標的に迫る。

その進行方向に割って入った若葉が、木刀を完璧なタイミングで抜き放った。

「はぁ――――!!」

旋刃盤が木刀に弾かれ、持ち主の下へと戻っていく。

すぐさま納刀し、次の攻撃に備える若葉の耳へ――――アラーム音が届いた。

「おっけー、二人とも時間だよ！」
元気な声をあげて、タイマーを止めに行くのは高嶋友奈。
標的、つまり一般市民役の人形へ三人が集まると、茂みと木の上から二つの人影が現れた。
土居球子と伊予島杏の二人が若葉たちと合流したところで、簡単な反省会が始まる。
「じゃあ、これまで通り、襲撃役の二人から意見を頼む」
「お、わかった。じゃあ、タマからは一つ……ぜんっぜん、当たらなくなったな！一昨日に比べたら大違いだ、ぶっタマげだ！」
「そうですね。私から見ても、皆さんの動きがすごく良くなってるように思います」
二人の意見に、友奈が嬉しそうに笑う。
「えへへ、昨日もぐんちゃんと若葉ちゃんと一緒にいっぱい練習したからね！　ね、ぐんちゃん！」
「ええ……そうね。確かに、昨日よりは……うまくできたと思う」
千景の言葉に、若葉もしっかりと頷く。
彼女も、特訓の成果を実感していた。二日前、訓練を始めた時とは比べ物にならないほど、全員よく動けるようになった。これならば大丈夫だろう、という思いもある。
だが、慢心することはできない。

他の訓練ではまだぎこちない部分はあるし、この訓練でもとっさの判断で迷わなくなったとは言い切れない。攻め手が二人でこれだというのに、本番を考えれば満足などできるはずもなかった。

「……よし、もう一度同じ内容で行って、それから休憩を入れよう。その後は、昨日と同じ移動訓練だ」

若葉は、緩みそうになる気を張り直すように声をあげる。

五人からそれぞれ了解が返り、再びセットされたタイマーが杭の上に置かれた。

「いっくよー！　よーい、スタート――――って、わぁああ!?」

「はっはっは！　どーだゆうな、ルールは破ってないからな!!」

「なッ、いきなり奇襲戦法だと……!?」

「昨日と同じね、それなら……どこかから伊予島さんの射撃が来るはず」

今日五度目の護衛戦闘訓練は、球子の強襲によって攻め手有利の開戦となった。

若葉が提案したのは、冬木の人々を護るための連携訓練だった。

あの日、若葉は自分の責任を強く感じていた。通信における約定は、大社からの指示によるものではあるが、若葉が説明して結んだものだ。

諏訪の歌野も、冬木の凛も、彼女の話に納得して約定に同意してくれた。その約定を、よりにもよって提案した側である四国が破り、それを指摘した凛に対して若葉は激昂し

てしまったのだ。

自分の責任を、果たすことができなかった。

自分が交わした約束事を、守ることができなかった。

何事にも報いを――――それが乃木の生き様だ。ならば、約束を反故し、信頼を裏切った自分や四国は、それでも頼ってくれる冬木の信頼にどうやったら報いることができるのだろうか。

そうして思いついたのは、作戦を完璧に成功させることだった。

勇者の役割は、四国の近くまでやって来た冬木の人々を、安全に結界内部まで辿り着かせること。

つまりは護衛役だが、若葉は作戦の中で大きな不安があった。

一つは、冬木側の移動方法だ。

二年前、若葉たちは危険な本州から、比較的安全な四国へと逃げることができた。だが、それは勇者の力を持った若葉の存在と、それ以上に巫女の素質に目覚めたひなたが安全な進路を指示してくれたからこそ成し遂げられたことだ。

冬木には、勇者も巫女もいない。

勇者の代わりの人材は話に聞いているが、巫女の助けもなく数百人規模の移動など、果たして上手くいくのだろうか。二年前、バーテックスと直接対峙した若葉からすれ

ば、とても成功するとは思えない作戦だった。

もう一つが、自分たちの問題だ。

この二年の間、勇者である若葉たちは確実に力を付けてきた。

対バーテックスの戦い方を身に付け、身を護り戦闘を補助する戦装束を作り出し、神樹の力を借りた攻撃方法を編み出した。力の足りなかったあの時とは違う、たとえ戦闘になってもバーテックスを相手に遅れをとるつもりなどない。

だが、それはあくまでバーテックスと戦うための訓練だ。

無防備な一般市民を護りながら戦う訓練など、若葉たちはしたことがない。果たして、今の自分たちで襲い来るだろう無数のバーテックスから人々を護り切れるのか、若葉には自信がなかった。

脱出作戦まで一週間――――――勇者として、何かできることがあるはずだ。

「そうだ……答えは、一つしかない……」

自信がないのなら、つければいい。

バーテックスと戦う自信も、技も、力も全部訓練をして身に付けてきた。今回だって、訓練の中で動き方や立ち回りを身に付ければ、不安もなくなるし、なにより冬木の人々をより安全に護ることに繋がるはずだ。

――――そうして、若葉の提案した訓練は、四国の勇者の関係に確かな変化を起こし

ていた。

連携訓練が終えた、夕暮れ時。

千景は一人、訓練場で大鎌を振るっていた。

「……まだ、遅い……、この……ッ」

風を切って振るわれる大鎌は、まだ千景の思うようには扱えない。

この二年、欠かさず行ってきた訓練で少しは手に馴染んできたようにも思う。けれど、千景の思う速さにはまだまだ遠く、訓練のたびに小さな苛立ちが募っていく。

二撃、三撃、弧を描く刃の軌跡は、彼女の狙い通りの位置を切り裂き、翻って切り払われる。

だが、まだこんな速度では足りない。

額から流れる汗が鬱陶しい。踏み込みながら二閃、流れそうになる体勢に逆らわず、回転しながら更に一撃。

「……まだ、……！」

切り払い、薙ぎ払い、叩き切り、突き倒し、いく通りもの動きを試してようやく止まる。

すっかり息が上がっていた。冬だというのに、身体が熱を発している。

「……もっと強く、もっと速くならないと……」

ここ数日、これまで個人で行っていた訓練を、連携を重視した内容で行っていた。

そのことについて、千景も異論はない。

彼女の大鎌は攻撃範囲が広いが、その分周囲の仲間に気を配る必要がある武器だ。連携の訓練をしてどう動けばいいのかも実践で確認できたし、事実今日の訓練でも危ない場面はなかった。

ただ、その分個人の訓練時間が削られてしまうのは問題だった。

千景は、まだ自分の強さに自信が持てていない。それは、他の勇者たちと違い、千景にはバーテックスと対峙した経験がないせいだ。映像記録で見た、自衛隊を蹂躙する敵の姿に、自分が本当に戦えるのかといつも不安に思う。

……あんな化け物を相手に、どうして自分たちが戦わなければいけないのだろう。

そんなことを考えたこともあった。

答えは簡単だ、千景たちだけがバーテックスと戦う力を持っているからでしかない。それを知らされた時、千景は自分の人生の中で、最悪に理不尽な理由だと思った。人を護りたい意志もない、悪いことをした罰でもないのに、ただ力があるというだけで化け物たちと命がけで戦わされるのだから。

怖い、のかもしれない。
死にたくない、生きたい、という思いは人一倍強い。
だからこそ、決して死なないために、バーテックスへの恐怖を振り払うために、千景はただひたすらに大鎌を振るい続ける。
そして、千景は知らないことだが、彼女の他にもう一人、日常的に自主訓練を行っている勇者がいた。
「……あれ？　郡さんも、自主訓練ですか？」
「え……、乃木、さん……？」
訓練場に入ってきた若葉に、千景の顔に微妙な表情が浮かぶ。
若葉は、見慣れない剣道着姿に、いつもの鉄棒の入った木刀を鞘に納めて携えていた。
千景の記憶では、いつもの訓練では身軽なスポーツウェアを着用していたはずだが、
「乃木さん……その格好、」
「ああ、これは居合の稽古着です。いつもは屋外でやってたんですが、久しぶりに訓練場で行うのもいいだろうと思ったので」
「そう……」
若葉は、千景から少し離れた場所で柔軟の体操を始めた。
千景の訓練の迷惑にならないように、という気遣いだろう。そういうことなら、と千

景もまた自分の訓練を再開する。
先と同じように、狙い通りの軌跡を描く彼女の刃。
「くッ……!!」
やはり思い通りの速さはでないが、それでも狙いは一切ぶれることなく最後までやり通し、千景は大きく息を吐いた。
激しく動いた割に、疲れはそれほどない。勇者としての力に目覚めてから、彼女たちの身体能力は人間のそれを遥かに上回っていた。今の千景は、鉄でできた大鎌を何時間でも振り回すことができる。
もう一度、と大鎌を構え直したところで、ふと覚えた違和感に千景の動きが止まった。
若葉が来てから三十分が過ぎているのだが……訓練の音がほとんど聞こえない。
まだ柔軟をしているのだろうか、と千景が目を向けると、若葉もまた訓練を始めていた。
抜刀から一の太刀、二の太刀、そして納刀。
一連の動作は流れるように行われる。だが、その動きに違和感を覚えて、千景は眉を顰めた。
――――異様に、遅い……?
不自然な停滞もなく、流麗に振るわれる木刀には、普段の若葉が行う居合の速さはど

こにもない。同じ動作を何回か繰り返し行ったかと思うと、同じ姿勢から異なる軌跡の太刀筋で、また複数回木刀を振るう。

十通りほどの動きを繰り返して、若葉は木刀を床に置く。

休憩かと思いきや、木刀を拾いながら抜き放つ動きを練習し始める。それもゆっくりと、太刀筋をブレさせることなく同じ動きを、

「……それは、何の訓練なの？」

「え？」

思わず疑問を投げかけてから、少し後悔する。

他人に集中を乱されるのは、あまり気分のいいものではない。特に、千景は若葉とそこまで親しくしている間柄でもなく、邪魔をしてしまった罪悪感に言葉が詰まる。

ただ、訓練の手を止めさせて、やはり何でもない、とは言えない。

「その、いつもの訓練や模擬戦の動きより……とても遅く、見えたから」

「型稽古といって、基礎の動きを身に付けたり、確認したりする練習なんです。どの場面で、どの動きが一番適しているかを何度も繰り返すことで、とっさの時に判断に迷わなくてすむんですよ」

「そう……」

棘のある返答でなかったことに安堵する。

こういう気性が、彼女がリーダーに選ばれた理由でもあるのだろう。厭戦的な自分は当然ながら、考えなしに動きがちな球子や臆病な杏、前に立って引っ張るタイプではない友奈に、勇者のまとめ役は難しい。

別に……、……認めてないわけじゃ、ないのだけれど……。

「先に、戻っているわ……明日は、訓練じゃなくて、作戦の確認だけ……よね？」

「ええ、その予定のはずです」

鎌を折り畳んで、布袋にしまう。

訓練場を出る直前、訓練中に言いそびれていたことを思い出した。

「……乃木さん、いいかしら……？」

「はい？　何ですか？」

まだ、例の型稽古を再開する前だったのだろう。

振り返った若葉の視線が、千景の視線と交錯する。

「もう少し、砕けた感じで話してくれればいいから……あなたも、多分……その方が指示しやすいでしょう……？」

それだけ告げて、今度こそ千景は訓練場を後にする。

昼間、友奈や球子、杏と一緒の時にはどうしても言えなかった言葉。

それを伝えられて良かったと、千景は微かに笑った。

夜になると、杏子と球子はよく一緒の部屋で過ごしていた。
大抵が、杏の部屋に球子が寝る前まで入り浸るだけだが、時々同じ部屋で寝ることもある。
今夜は、その時々の日だ。
「あんず～、まだ寝ないのか～？」
「うん、もうちょっとだから」
何やら熱心にノートへ書き続ける杏の姿を、球子はベッドの上からぼんやりと眺めていた。
ここ数日、もっと言えば連携訓練が始まってから、杏が活き活きとし始めた気がする。前よりは少し積極的に訓練へ参加するようになったし、訓練中の発言はずっと多くなった。
いいことだ、と思う反面、球子には少し不安に思う変化だ。
杏は、球子にとって護ると決めた女の子だ。
戦うことに対して、後ろ向きになるよりは前向きになった方がいいのは分かっている。けれど、行き過ぎて無鉄砲に突っ込むようになってしまうんじゃないかと、なんとなく心配になってしまう。

心配のし過ぎ、なのだろうか？

悩み過ぎて唸り声を上げる球子を他所に、杏は満足したのかようやくノートを閉じた。

「お待たせ、いつもより色々思いついちゃって」

「まったくだ！　まあいい、じゃあ一緒に寝るぞーッ！」

「元気いっぱいだなぁ、タマっち先輩は」

杏が苦笑しながらベッドに上がってくる。

ベッドは一人用なのだが、球子が小柄なおかげで、工夫すれば二人でも十分眠れる広さがあった。

「じゃあ、電気消すよー」

「おー」

二人で身を寄せ合うと、すぐに布団の中が暖かくなってくる。

ほんの数日前、タマっち先輩はあったかいな～、冬でも寒くなくていいな～、と杏が思わず呟いたほどの暖房性能。ちなみに、球子はこの発言に、タマは小さな子どもか!?

それとも湯たんぽか!?　と噛みついたのだが、それはそれ、暖かいことに変わりはない。

「……そういえば、あさってだな、作戦」

「うん……そうだね」
球子の言葉に、手が強く握られる。
横を見ると、杏の顔が見えた。少し不安な表情に、球子は思わず苦笑する。
「なんだ、怖いのか～？　大丈夫だ、あんずにはタマがついてる。向かってくるバーテックスは、タマに全部任せタマえッ！　ってな」
「もう……タマっち先輩も、無茶したらだめなんだからね？」
「わかってるって、大丈夫だ」
「……なんでだろう、分かってない気がする」
ぎゅッと手を握り返すと、同じくらいの力で握り返される。
お互いになんとなく笑い合って、
「おやすみ、タマっち先輩」
「ああ、おやすみ、あんず」
二人は、疲れに引き込まれるままに、夢の世界へと旅立った。

二〇十七年十二月十八日。
玄関の戸に鍵をかける。
夕刻、一人衛宮邸を出た士郎は、門の外で一度立ち止まった。

「――――それじゃあ、行ってくる」
もう、帰ってくることはない。
じきに訪れるだろうこの街の終わりに向けて、魔術使いは足を踏み出す。

二〇十七年十二月十九日。
――――午前二時。
大空洞には、二つの影があった。
「さて、と……衛宮くん、準備はできてる？」
「いつでも行ける、問題ない」
士郎の答えに頷きを返して、凛は眼下の魔術炉心に目を向ける。
……酷い状態だ。あれほど膨大な魔力を湛えていた大聖杯は、既に残り火が未練がましく灯っているに過ぎない。もっとも、宝具級の結界を二年半近くも維持させ、破られるたびに張り直させてきたのだから、そう考えればよくもった方なのだろう。
そして、その残り火も今日で尽きる。
「――――Ａｎｆａｎｇ（セット）」
魔術刻印が輝き始める。
彼女の最も万全になる時刻、活性化していく魔力はその証明だ。握りしめた宝石に込

められた魔力を最短・最効率の手順で開放し、超伐級の奇跡に挑みかかる。

「einmal zum Teil(開)des Sternes(始) zur▪ck Das Fleisch(接) geht(続)、」

魔術炉心を高速回転、残り僅かな魔力を活性化させ、膨張させる。

これで、もう後には退けなくなった。

次々に石を消費しながら、凛は大聖杯への干渉を続行する。

「まずは、一つ……ッ!!」

初めの願望を入力すると同時に、大聖杯の魔力が大きく目減りした。

間髪入れず、願望器に働きかける。

「次！　行くわよ、衛宮くん！」

「ああ、タイミングは任せる――――――！」

第二の願望が形となる。

魔力の消費は、初めのものとは比較にならないほど少ない。ただ、効果ははっきりと表れた。

大空洞から、士郎の姿が消える。

魔法にも等しい空間転移。

刻々と減り続ける魔力を感じながら、凛は冷静にその時を待つ。

……降り立った先は、完全に異界と化していた。

瀬戸大橋、四国と本州を繋ぐ十の橋の総称。

その内、四国に直接架けられた南備讃瀬戸大橋は、四国の結界に覆われているため直接転移することができない。士郎が降り立ったのは、その次に四国へ近い北備讃瀬戸大橋の上だ。

そして大橋の周囲、海に突き立った四本の巨大な円柱。

五百メートル四方を覆う結界は、内と外を完全に隔離していた。結界の抵抗を受けず干渉できるのは、結界を維持する大聖杯を用いるか、同化した四国の結界内部からに限られる。

そして、その隔離された空間に――――――膨大な数のバーテックスが封じられていた。

四国の周辺、特に瀬戸大橋周辺はバーテックスが多いと四国側から報告があったのは事実だ。だが、百程度という話で、これほどの数は作戦段階でも想定していない。

士郎の顔に焦りが浮かんだ。

「――――――凍結（フリーズ・アウト）、解除」

突如変貌した状況に困惑しているのか、それとも現れた標的の出方を窺っているの

か。

その隙に、士郎が無数の刀剣を投影する。

ランクも、刀身の長さも、和も洋も中も区別なく創り出された武具の数々が、漂う化け物たちに狙いを定めた。

「――――全投影連続層写(ソードバレルフルオープン)！」

串刺しにされた化け物の断末魔が、開戦の狼煙となった。

次々と飛来する小型バーテックスを、紅い流星が射抜いて砕く。

大聖杯とのリンクも今回限り。流入する魔力を余さず使い、士郎は確実に結界内の敵を減らしていく。既に半数のバーテックスが撃破されていたが、それでもなお視界の至る所に白い影が蠢いている。

「……く、そ……ッ！」

番えた矢は赤原猟犬(フルンティング)。

三射目となる魔弾が、融合しかけていたバーテックスを粉砕する。前の二射も未だ健在であり、込めた魔力が尽きるまで標的を貫き続けるはずだ。

だがそれも、射手が生存し、意識を手放していなければの話だが。

「――――、がッ、!?!」

突然の衝撃に、士郎の体勢が大きく崩れる。

いや、体勢だけではない。
咄嗟に飛び退いた足元から、瓦礫をまき散らしながら進化型が飛び出した。橋の下に潜んで融合したのだろう、棒状の進化個体は上空に静止すると、再び士郎へと狙いを定める。
「ぐ……」
士郎の意識が進化型に集中する。
射手の意識が反映され、三条の紅い軌跡は上空で交差し、進化型を消滅させる。如何に強度を増した個体であろうと、防御に特化した進化でなければ魔弾は止められない。
だが、それは失策だった。
赤原猟犬（フルンティング）は遠く離れ、射手は万全には程遠い。包囲する間さえ惜しみ、我先にとバーテックスは無防備な獲物へと襲い掛かった。
「ッ、――――投影（トレース）、」
投影は間に合わない。魔弾も、到達にはあと半秒遅い。
そして、眼前に迫ったバーテックスの身体に、鋭い一閃が叩き込まれた。
「……無事か!?」
消滅していく化け物の向こう、駆け寄ってくる少女の姿が見えた。
涼しげな青と白の戦装束を身にまとい、手には士郎すら目を見張るほどの神秘を宿し

た刀が握られている。
「すまない、遅れたようだ……、……まさか、生き残りはあなただけなのか……？」
蒼白となった顔は、まだ幼さを残していた。
立ち上がった士郎の、肩ほどしかない身長。士郎は、即座に彼女の正体を悟った。
「いや、冬木の住民はこれからやって来る……ここにいるのは、俺一人だけなんだが、」
「……そう、か。それなら、良かった。なら、あなただけでも四国の中へ、」
誤解が解け、安堵の表情を見せる少女。
だが、士郎の顔に余裕はない。
凛と交わした刻限は十分、結界の限界は二十分にも満たない目算だった。
「手を貸してくれ、四国の勇者。俺は、いや――――私は、衛宮士郎。冬木で勇者の代わりをしていた者だ」
時間が迫る。
タイム・リミットは――――あと七分。

第八話　リミテッド・オーバー①

「……ぅぉぉぉぉぉぉあぁッ!!」

雄叫びを上げ、若葉が白刃を振るう。

【生大刀】――――かってこの国の大神が振るったとされる神器を宿した刃が、バーテックスを次々に斬り裂いていく。刃先は霞むほどに加速し、一太刀ごとに白い巨体が大気に溶けて消滅する。

何体、何十体、どれだけの敵を斬り倒しても、若葉はほとんど疲労を感じなかった。

身体は羽のように軽く、刀は手足の延長のように扱える。二年前は朧気だった感触が、今は実戦の中ではっきりと掴むことができた。

これが――――勇者の力。

「このぉ！　勇者、パ――――ンチ!!!」

「負けない……お前たちは、一体残らず屠ってやる……ッ!!」

若葉の背後でも、仲間たちの戦う音が聞こえてくる。

友奈も千景も、今のところは危なげなく戦っていた。

友奈の武装は、両手に付けた手甲。武術を修めていたという彼女は、近接戦闘を主体としている。それ故に、若葉たちの中では最もリーチが短く、集団戦では不利に回りやすい。

その友奈の不得手を、千景が上手く補っていた。

精神的な余裕がないのか、動きは他の二人よりはぎこちないものの、鎌という武器の持つ、長いリーチと広い攻撃範囲を十分に活かした立ち回りで、多方向からの攻勢に対処しきれない友奈の負担を減らしている。

……連携訓練の成果が出ている。

確かな実感を得ながら、若葉の表情は曇ったままだ。

「はぁ……はぁ……、若葉ちゃん、これ……全部倒さないと、いけないんだよね!?」

「……あぁ、そうだ。この閉じた空間にいるバーテックスを全部、あと五分の内に倒し尽くさなければならない!」

「……無理よ。時間があれば、ともかく……あと五分で、この数を倒すなんて」

若葉の返答に、千景が大鎌で斬りつけながら吐き捨てる。

彼女の気持ちは、若葉にもよく理解できた。

視界を阻む白い壁。どれだけ打ち倒しても穴をあけることすら困難な状況が続けば、終わりがないのではないかと思わずにはいられない。実際、この包囲網を全滅させたと

しても、敵の総数に比べれば微々たるものだろう。
それでも、
「それでも、やるしかない。冬木の人々の命は、私たちにかかっている！」
殺到するバーテックスを倒し続けながら、若葉は吠える。
「――――成し遂げる！　どんな難行だろうと、必ず！」
冬木の勇者代理を名乗る男からの要請は、大きく分けて二つだった。
一つが、五分以内に結界内に取り残されているバーテックスを全て殲滅すること。
もう一つが、転移してくるという冬木の住民を、四国の結界内まで護衛すること。
その要請を聞いた時、若葉は不可能だと思った。
今回の作戦に携わっている勇者は、若葉と千景、そして友奈の三人。
球子と杏の二人は、四国の結界内部で待機している。これは、作戦の隙を突いてバーテックスが四国に侵入してくる可能性を考慮しての判断だったのだが、もし二人もいたならば――――そう思ってしまうほど、結界内のバーテックスは多かった。多すぎた。
それでも、要請を突っぱねることなどできるはずもない。
護衛にしても、訓練期間は短くまだまだ不安も多い。なにより、バーテックスの有無が作戦の成否に影響するのは明らかだ。なら、全てを倒すことができなくても、数を減らせば減らすほど、危険性は低くなる。

そのはずだ……いや、そうであってくれ。
荒れ狂う質量の嵐のただ中で、勇者たちは少しずつ、だが確実に敵の数を減らしていった。
その速度は、五分という限られた時間で敵を一掃するにはあまりにも遅すぎた。恐らく、彼女たちがもっとリスクを負うような戦術を取っていれば、もっと多くの勇者がいたならば、結界内のバーテックスを倒し尽くすこともできたのかもしれない。
だが、これはあくまであり得なかったＩＦ（もしも）の話。
現実として、勇者たちではバーテックスの殲滅には足りず。
しかし、結界内の敵の残数は、僅かな間に数えられるほど減っていた。

「……勇者の概念武装には、バーテックスへの特攻効果があるのか」
そびえ立つ水晶の柱、その一つの上。
土郎は絶好の狙撃ポイントに陣取り、眼下のバーテックスを次々と射抜いていた。
高さ二百メートルに届く位置からであっても、鷹の眼は瀬戸大橋の上の砂一粒たりとも見逃さない。勇者を襲おうとする進化型を処理しながら、彼女たちの振るう武装に土郎の関心は向けられていた。
蒼い戦装束の勇者の、研ぎ澄まされた白刃の太刀。

紅い戦装束の勇者の、呪念滲む深紅の大鎌。
桃色の戦装束の勇者の、両手を覆う手甲。
そのどれもが、一撃で小型バーテックスを屠っている。
それは、勇者当人の力や技術によるものだけでなく、彼女らの武器そのものがバーテックスを倒す為だけに作られたものだからだろう。
概念武装の一種、宝具など伝承に残る武装そのものではなく、元となる伝承の要素を複数組み込むことで真作の力を宿す模型。引き出せる力などは限られるものの、用途が明らかであれば必要な要素を意図的に選び抜くことで、特化した性能を発揮する。
勇者の武器は、その模型を更に打ち直した改造品に近い。
「勇者の個々に合わせた改造礼装……俺が投影したところで、真価は引き出せそうにないな」
放つ魔弾は、既に八を数えている。
飛び出した赤原猟犬（フルンティング）が、勇者たちの直上で形成されかけていた個体を三方向から撃墜したのを確認して、士郎は微かに眉を顰めた。
彼の視界、そのほとんどを覆い尽くすほどいたバーテックス。
殲滅開始から五分あまり、その姿はほとんど視認できないほど減っていた。勇者の周囲で渦巻いている個体も五十弱ほど、上空や橋の上、海上を見ても白い巨体は見当たら

ない。

そう、《いるはずの小型バーテックス》が五百程度見当たらない。

「はッ――――――確かに、四国の勇者には有効な手なんだろうが、」

投影するは、禍々しい気配を纏う螺旋剣。

それを矢に変形させながら、士郎は真っ逆さまに落ちていく。

頭を下に、足を上に。重力に引かれるに任せて、冷静に造り出した矢を弓に番えた。

「俺にとって、その手を視るのは二度目だぞ、化け物」

吊り橋とすれ違った直後、橋の下のそれと視線が交わる。

それは、巨大な蛇だった。

これまで見た個体の中で、これほど大きなものはなかった。おそらく、姿を隠した小型バーテックスは全て、この進化型へと融合したのだ。

勇者たちの死角から、まとめて喰い殺す機を窺っていたのか。蜷局を巻き、鎌首をもたげたバーテックスが飛び掛かる寸前、士郎の指が矢から離れる。

「我が骨子は、捻れ狂う……偽・螺旋剣（カラド・ボルグ）……ッ!!…」

大気を捻じ切って放たれた魔弾が、蛇の頭部を粉砕した。

すかさず、準備していた矢を投影し、弓に番える。隠れ潜む敵が目の前の個体だけとは限らないと、何が現れても即座に射抜くつもりだった。

だからこそ、一瞬反応が遅れた。

「……チッ、こいつ」

弾けた頭部が再生し、狙撃手へと狙いを定めていた。

散り散りになった部位も同じだ。再生して、別の個体に――元と同じ大きさの個体へと、形成されようとしている。

その光景を前に、士郎は投影していた矢を破棄する。

代わりに創り出したのは、鈍らの西洋剣。それに壊れる寸前まで魔力を込めて、矢へと形を変える。

「――投影（トレース・オン）、開始」

矢は、貫通せずに頭部の成り損ないへと突き立った。

ただ一つ、矢を射かけられなかった進化型バーテックスだけが隙を突き、猛然と士郎へ襲い掛かる。

「ぐッ――――、投影（トリガー）、」

大顎のような器官に弓ごと左腕を捕らわれ、士郎の顔が苦悶に歪む。

壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）で不完全なバーテックスが消し飛ぶ中、蛇型のバーテックスはくわえ込んだ獲物を逃さぬよう、海中へと引きずり込んだ。

その瞬間、若葉たちを取り囲んでいたバーテックスにも変化が生じた。
渦巻く中心が勇者から、一体のバーテックスへと変わる。
数十体の小型の個体が寄せ集まり、融け合い、姿を変えていく様はおぞましさすら感じる。唐突に始まった現象に千景と友奈は戸惑い、ただ一人それを以前見たことがあった若葉は焦りを覚えた。
「進化型は、これまでのバーテックスとは桁違いの強さを持っている！　二人とも、油断は絶対にするな!!」
バーテックスの進化は急速に進む。
見上げるほどの球体が収縮し、収縮し、収縮し――――人間よりふた回り大きい程度になって、ようやく球体が崩れ始めた。
来る、と身構えた勇者たちより先んじて、進化途中のバーテックスへと攻撃を仕掛けたものがあった。
上空高くより落ちる八条の流星――――赤原猟犬（フルンティング）が、最後の獲物へと牙を剥く。
それぞれ異なる方向から狙う魔弾を、バーテックスが弾くことなどできるはずがない。万に一つ、全ての弾丸を迎撃できたにしても同じこと、真紅の猟犬はその身を砕かれるまで追い立てることを止めはしない。
だが、逆を言えば、砕かれてしまえばそれまでということだ。

「……なッ!?」
バーテックスの直上で、魔弾全てが砕け散る。
その一瞬前の攻防に、若葉は驚愕を抑えられない。勇者の強化された視力は、目の前の『巨人のような』バーテックスが何をしたのか、その一部始終を捉えていた。
化け物は、腕のように伸びた部位で四つの魔弾を弾いていた。
その弾かれた魔弾が、弾かれなかった残りの魔弾に衝突し、互いを砕きあったのだ。
偶然にしては出来すぎた現象に、若葉の背に悪寒が走る。
間違いない。
巨人型バーテックスは、狙ってあの芸当を成し遂げたのだ。
「……馬鹿な、バーテックスにそんな……」
頭部のない巨人のようなバーテックスの腕が更に膨れ上がり、巨大な棍棒のようになった。
そして、
「来るぞ……ッ!!」
若葉の警告と同時、白い巨体が飛翔した。
音すらも置き去りにし、バーテックスは狙いを定めた獲物へと肉薄する。
「く、避け、」

「て、や――――――!!」

避けられない、と確信して刀を構えた若葉の前に、友奈が飛び出していた。

気合いと共に突き出した拳と棍棒がぶつかり合い、

「うぁ……ッ!?」

衝突寸前に翻ったバーテックスの一撃が、友奈の小柄な身体を横薙ぎに吹き飛ばした。

辛うじて手甲を滑り込ませていなければ、致命打になったことは間違いないほどの剛撃。

転がる勇者に追い打ちをかけるべく、巨人型のバーテックスは四肢のような器官を膨張させた。二回りほども膨れあがった巨躯が、次撃の威力を嫌でも想起させる。

「させる、ものかぁぁぁぁッ!!」

「高嶋さんに……よくもッ!!」

その身体に、二筋の軌跡が走った。

前と後ろ、勇者の放った二つの斬撃が足を模した器官の一つを斬り飛ばしたのだ。当然、バランスを崩したバーテックスの身体に、剣戟の雨が降りかかる。

「やぁ――――――!!」

大鎌で斬りかかりながら、千景はその手応えに戦慄した。

勇者の猛攻は、確かにバーテックスの身体を損傷させていた。防戦に回っている敵に比べて、手数の上でも圧倒している。

だが、浅い。

より強く、より速く放たれた斬撃は、白い巨体に潜り込むことなく弾かれてしまう。渾身の一撃も、引っ掻き傷を一つ増やすのが精一杯な有様だ。

そして、若葉も同じように焦りを感じ始めていた。

「千景、このバーテックスはさっきまでの奴とは違う！　一度距離を取って、態勢を立て直す！」

「えぇ、わかったわ……」

千景が離脱するのを待って、若葉も一太刀の後に後ろへ跳躍した。

バーテックスの身体に傷はない。損傷とも呼べない浅い傷は当然のこと、切断した足すらも修復が終わっている。そして、辛うじて人型のようだった外観はより人間の、屈強な男のような体躯に変形していた。

そして、存在しない頭部の代わりに、肩から肩にかけて、大きく口を模した器官がパックリと開いていた。

「……■■■■■■■■■■■————！」

「ぐッ……!?」

「ッ……なに、こいつ……ッ！」

突如響き渡った咆哮に、千景が悪態を吐く。

思わず耳を塞ぎたくなるほどの大音響。それでも武器を構えた手を緩めないのは、耳を傷めることよりも決定的な隙を曝す危険を恐れたから。

やがて咆哮が収まった。

その、一瞬の間隙を捉えた奇襲だった。

「勇者、パ――――ンチ!!」

若葉と千景が、連携して斬りかかるよりも速く、

巨人型バーテックスが、隙のあった紅の勇者を叩き潰すよりも早く、

倒れ伏していたはずの友奈の拳が、バーテックスの側面にめり込んでいた。

「もう、いっぱ――――っ!!!」

ぐらりと揺れた巨体へと、間髪入れず二撃目の拳が叩きつけられる。

追撃はしかし、手のような部位が割り込まれ防がれていた。それは、友奈の腕を絡めとるように伸び、逃れようとした彼女を拘束する。

「■■■■■■■■■■■■■■■――――！」

勝ち誇ったように雄叫びを上げて、振り下ろされた棍棒の一撃が友奈を襲う。

「友奈……ッ」

「高嶋さん……！」

飛び出した若葉は、彼我の距離から間に合わないと悟った。

確かに、勇者の身体能力は人間の域を外れている。

だが、届かない。若葉の全力を以てしても、彼女の刀が届くより早く巨人の一撃が友奈を捉えてしまう。

若葉より先んじて距離を詰めていた千景は、寸前で間に合うと確信していた。

だが、足りない。

友奈の前に飛び込むことはできても、あのバーテックスの一撃を受け止めるだけの力が彼女にはない。

友奈を救う力を求めて、千景は自身の内面に意識を集中させた。神樹の持つ概念記録にアクセスし、そこから力を抽出し、自らの身体に宿す――――、

「……、七人御先……！」

凶悪な一撃は、五つの影によって阻まれた。

拮抗は一瞬のこと、バーテックスは蹴散らすように剛撃を押し通し、邪魔な影をまとめて薙ぎ倒した。

だが、その先にいるはずの、捕らえていた桜色の勇者の姿がない。拘束していた器官

はズタズタに切り裂かれ、たった今倒したはずの人影も一つ残らず消失していた。
「高嶋さん、大丈夫……!?　怪我は……見当たらないけど、目に見えない所とか……!?」
「ううん、大丈夫！　ぐんちゃんが助けてくれたお陰だよ！」
「あ、ありがとう……よかった、本当に……」
ホッと安堵の息を吐く、七人の千景。
その光景に、横抱きに抱えられていた友奈が目をパチクリさせると、
「ぐんちゃんって、忍者だったの……？」
「違うわ、高嶋さん……これは、私が呼び出した精霊の能力……」
千景が纏った『七人御先』の力は、宿主を七つの地点に同時に存在させる。
この『七』の数字は不変のものであり、例え数人の千景が倒されたとしても必ず次の瞬間には『七人』に戻っている。つまり、千景は同時に七人全員が殺されない限りは不死身となったのだ。
勇者の『切り札』――――肉体に大きな負担がかかるため、極力使わないと事前に決めていた手段。
リスクは大きい、だがそれに見合うだけの力を確かに千景は感じていた。
「……やむを得ない、か……」
呟く若葉の眼前に、バーテックスが迫る。

『切り札』を使った千景より、若葉の方が対処できると判断したのか。事実、強化されているとはいえ、若葉の膂力では巨人型の一撃を受け止めることはできない。

だが、何も真正面から受け止めることだけが戦術ではない。

「来い――――」

若葉が切り札を発動させ、剛撃は空を切った。

体勢を崩した怨敵へ襲い掛かる蒼い閃光。瞬く間に全身へ傷を刻んだのは、新たな力を宿した若葉だった。

『源義経』――――それが、若葉が神樹から引き出した精霊の名前。

その昔、源平の合戦で活躍した若武者は、壇ノ浦の戦いにおいて甲冑を身にまとったまま舟から舟へと、まるで飛ぶように跳躍し、戦場を縦横無尽に駆け巡ったという。

八艘飛び、と呼ばれたその技を駆使する若葉は、空中を自在に跳躍する。

上下左右、あらゆる方向から襲い来る斬撃は、まるで嵐のようだ。

「これで、どうだ……ッ!?」

瞬く間に、バーテックスの白い巨体に無数の傷が刻まれる。

再生しかけていた腕のような部位は千切れ飛び、足を模した器官も削り取られ、立っているのがやっとなほど。

このまま押し切れる、そう考えるのも当然のことだろう。

反撃の隙すら許さず、圧倒的な機動力で若葉は終始バーテックスを攻め続けていた。
足の一本を両断した際、勝利を確信した若葉の次撃は、体勢を崩しているだろう相手に止めを刺すためにより速く、単調なものになっていた。
離れていた友奈が異変に気付いた。が、警告は遅く、若葉は速過ぎた。
「若葉ちゃん、だめ――――――!!」
「！」
眼前に迫る白い棍棒に、自分が罠にかかったことを理解した。
崩れていると思った敵は万全の構えで飛び込んでくる獲物を待ち構えていた。振り下ろされる一撃の速さは、足や腕を斬り落とす前と比べても遜色ない。
何故、という疑問はすぐに氷解した。
存在しない足で踏み込み、失った腕でバランスを取る巨人はしかし、全く体勢が崩れていない。不自然なまでに自然に剛撃を放つ様は、一周回って異様ですらあった。
動きは人間そのものでありながら、人間の構造的縛りを全く無視している。それはつまり――――人体の行動限界など、当てはまらない存在だということ。
「まだだ……、」
不可避の攻撃を前に、それでも僅かな勝機を探る。
まだだ、若葉はまだ死ぬことはできない。

バーテックスに報いを受けさせる、そう誓ってこの二年半もの間、勇者として訓練を続けてきた。数十、数百、今日この時だけで数多の怨敵を斬り伏せたが、その程度で足りるはずがない。

友達を喰い殺し、抵抗できない人々を磨り潰し、人類を滅亡の縁にまで追いやったバーテックス。

奴らに報いを受けさせなければ、

「こんな所で、死ぬことなどできるはずがない――――――！」

若葉の想いが宿ったのか、刀が淡い光を帯びる。

それが何の変化かは分からない。

分からないまま振るわれた刃は、その真価を担い手に見せることはなかった。

「……■■■■■■■■■■■■――――――!?!」

吹き飛ばされる白い巨体。

若葉と切り結んだ結果ではない。横転したバーテックスを、突き立った剣の生み出す爆風が追い打ちをかける。

「……互いに、苦戦しているみたいだな」

男は、まさしく満身創痍の出で立ちだった。

左手は流血し、身に付けた装束はボロ雑巾のよう。呼吸も荒く、疲労感が滲み出てい

た。

それでも、男の眼に曇りはない。

「時間だ。あれの相手は私が引き受ける、代わりに――――――冬木の皆のことを、頼む」

そして、刻限は訪れた。

冬木の魔術炉心、大聖杯の最後の奇跡が、

残り僅かな魔力を費やした、魔法に等しい大魔術が行使される。

第八・五話　タイム・アウト

――――それは、刹那にも満たない攻防だった。
飛沫が上がり、海が割れる。
吊り橋に飛び上がった士郎は、まさしく満身創痍だった。
「はぁ――――、はぁ――――、」
荒れる息を抑える。
赤く染まった左腕から、バーテックスに噛み砕かれた弓の残骸が零れ落ちた。
痛みは、ない。神経を損傷したのか、あるいは別に原因があるのか。
――――問題にもならない。バーテックスは結界内に未だ存在するものの、傷を負った腕一本以外は問題なく動かすことができる。
まだ、剣を握ることはできる。
戦うことができる。
「冬木に、こいつが出なかったのは幸運だったな……」
眼下の海上、その大渦の中から――――九頭竜が顔を覗かせている。

いや、蛇の集合体であるそれは、ギリシャ神話のヒュドラの方が近いだろうか。
実際、それは蛇型バーテックスが九体、絡み合っているだけのものだ。化け物たちは互いに締め付け、海中の何かを圧しながら、まるで伝説に出てくる魔物のように無能な狙撃手を嘲笑う。
斬撃に対抗策を持つ進化体――――それが、蛇型バーテックスの正体だ。
海中に引きずり込んだ士郎に九分割された後、その切れ端全てが一個体として復活を遂げていた。
「……分割されると増えるのか。確かに、俺の剣でお前を殺しきるのは、難題なんだろうが、」
取れる手段は、極めて限定的だ。
左手を潰され、狙撃はおろか使い慣れた夫婦剣すら今や片手落ち。魔力も十全とはいえず、敵は健在かつ下手な損傷はいたずらに戦力を増やしてしまう。
彼の王の聖剣であれば、跡形もなく焼き払えるだろう。あるいは、クランの猛犬の投擲でも殲滅できるかもしれない。
士郎の手札には、約束された勝利の剣（エクスカリバー）も突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルク）もない。
「――――投影（トレース・オン）、開始。工程完了（ロールアウト）、全投影待機（バレット・クリア）」
追い込まれた状況の中で、士郎の思考は冴えていた。

絶殺の手段は既に組み上がっている。
必要な武装を選択し、投影する。魔力の出し惜しみはない、三十を超える刀剣が背後の空間に滲み出た。
その光景に、バーテックスは嘲り笑う。
出現した剣は、どれも確かに神秘を宿してはいた。だが、無銘の武装に宿る神秘などたかが知れている。
傷は負うだろうが、己を倒すことなど叶うはずがない。
怪物の判断は真っ当であり、その狙いは既に撃ち出されるだろうガラクタの対処ではなく、愚かで不遜なこの人間を殺す方へと移行している。
そして、
「武装を奪って使わないのなら、すぐにでも捨てるべきだったんだ、お前は。後生大事に抱え込んでいるそれは、俺にとっては使い捨てのきく剣の一振りに過ぎない」
仕込みは、既に終えている。
勝ち誇るバーテックスが包み隠していた岩塊へ、士郎は最後の役割を与える。
「――――贋作だからこそ、こういう使い方もある」
壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）。
魔力爆弾と化した岩塊は、その爆発で密着していたバーテックスをバラバラに吹き飛

ばした。

欠片のほとんどは爆発の熱で焼き尽くされ、難を逃れた細かな破片も投影宝具の掃射によってことごとく撃ち落とされた。立ち込める爆炎が晴れた後、蛇型バーテックスは跡形もなく焼失していた。

第九話　リミテッド・オーバー②

白い巨人が迫る。
「……ッ、がアッ……!?!」
ボロ屑のような守護者を撥ね飛ばし、大地を踏み鳴らして進撃する。
「……うぉ、おぉおおおあああああああ……ッ!!」
もはや神樹の勇者など眼中にない。
唐突に現れた無防備な人間たちを殺戮する為に、バーテックスは突撃を繰り返す。
「――――投影（トレース・オン）、開始」
恐怖に震える人間たちに殺意を振りまく怪物はしかし、
「――――投影（トリガー・オフ）、装填」
幾度の突撃を経ても、
「赤原猟犬（フルンティング）……ッ！」
立ち塞がる魔術使いの守護を、未だ突破できずにいた。
「はぁ――――ッ、だあ――――ッ！」

「■■■■■■■■■■――――!」
無造作に振るわれた魔剣が、音速に届こうという剛撃を真正面から迎え撃つ。
それは、無謀な剣戟だった。
暴風さながらに荒れ狂う怪物と、魔術使いだが人間である衛宮士郎。種族どころか、存在そのものからして異なる両者の間には、膂力においても絶望的なまでの差が存在する。
まともに切り結べば、まず叩き潰される。
否、音速に迫るバーテックスの動きは既に人間が対応できる領域ではない。
「……■■■■、■■■■……!?」
「ぐッ……、ぁ……!!」
だが、本来勝負ですらない力比べは、士郎の『反則』によって確かに拮抗していた。
ただ振り回すだけで的確な斬撃を放つ、北欧の魔剣――赤原猟犬(フルンティング)。そして、宝具から読み取った担い手の筋力を複製し、片腕を封じられながらもバーテックスの猛攻を凌ぐことに成功している。
「■■■■■■■■……ッ!」
とはいえ、士郎にも余裕などありはしない。
慣れない武具を用いた戦闘では、普段の術理は当てはまらない。

身体は消耗し、魔力も底を尽きかけている。聖杯のバックアップを受けられない今、少し前までのような魔力に任せた投影の乱発も難しい。

そして、最善手を打ち続けたとしても――――剛撃により、投影宝具は限界を迎える。

「く、そッ……、投影（トレース）・開始（オン）」

再び創り出される黒い魔剣。

普段の干将莫耶ほどスムーズではないものの、紙一重のタイミングで投影された赤原猟犬（フルンティング）が致命の一撃を弾き返す。渾身の蹴りが巨重を宙に押し上げ、バーテックスは再び振り出しへと押し戻された。

状況は、良くはない。

進化型の目標は、荷物という重りを持った無力な人間たちだ。脅威度よりも数を優先するバーテックスにとって、士郎は壊れにくい障害物となんら変わりないのだろう。

だからこそ、バーテックスの猛攻は苛烈を極めた。

突進と剛撃をただ繰り返す。それを、音速に迫る速度で行われるとあっては、投影する武装を選んでいる暇すらない。そしてバーテックスに決定打を与えられないまま、士郎の魔力と体力は確実に削られていく。反対に、バーテックスの動きは時間が経つにつれて精度と速度が増してきているように思えた。

時間は、敵に味方している。

時間稼ぎが目的だというのに、あまりに不条理な話だ。
「そう簡単に、攻め切らせると……、はッ……思うなよ」
だが、悪くもない。
強がりでもなく、士郎は冷静にそう結論づけた。
既に、冬木の住人が転移してから五分以上。既に喧騒は遠く、目視で確認しなくとも避難が順調に進んでいることは分かる。
それなら、膠着した戦いにもまだ意味がある。
「あと少しなんだ。それまでは俺に付き合ってもらうぞ、化け物」
無造作に魔剣を構えた青年が、巨人を模した尖兵と激突する。

繰り返される戦闘の余波に、小さく悲鳴が上がる。
反対に言えば、悲鳴が上がるだけですんでいる。初めは振動のたびに竦んで動けなくなっていた冬木の住民たちは、怯えつつも懸命に四国へと歩を進めていた。
「……、」
護衛についていた若葉は、僅かな苛立ちを覚えていた。
計画は、一応順調といえる。
結界は想像以上に強固で、バーテックスの侵入をほとんど許していない。例外的に防

壁を抜いた数体も、護衛についた勇者三人で問題なく対処できている。
結界内に唯一残存する進化体は、冬木の護り手が押し留めている。
仮に、彼が――衛宮士郎が倒れたとしても、精霊の力を宿した若葉と千景が二人でかかれば、避難が完了するまでの時間は十分稼げるはずだ。
何も問題はない、あと数分の内に避難は全て終わる。
無力な人々を狙って無数のバーテックスが集まっていても、結界の内側に入ってこれないのなら問題ではない。
運よく入ってこれたとしても、少数であるのならば問題にならない。
勇者よりも強大な力を振るうバーテックスであっても、避難に差し障りがないのなら無理に相手をする必要はない。
……目の前の怨敵（バーテックス）に、報復を受けさせることも叶わないとしても、か。
不可視の障壁に体当たりを続けるバーテックスの姿は、数体ならば滑稽に映るだろう。
だが、それが数十、数百ともなれば人間を怯えさせるには十分だ。
恐怖に震える人間たちに、ガチガチと口に似た器官を鳴らしながら殺意を振りまく忌々しい尖兵たち。荷重を加えられた結界が軋み、異様に鳴動する。恐怖に竦む人間の姿を嘲笑うようなバーテックスの気配が、募った憎悪と怒気をどこまでも煽り立てる。

「乃木さん……少し、離れ過ぎてるわ」
少し険のある声で我に返る。
気づけば、集団はずいぶん遠くに移動していた。先頭はもう四国の領域に辿り着いているかもしれない。
「すまない、気をとられていた。すぐ持ち場につく」
「……そう。なら、いいのだけど」
険しげな表情のまま千景が戻っていく。
彼女の様子に違和感を覚えたが、今は持ち場に戻る方が優先だ。疑問は、すぐに思考の端へと押し込まれる。
最後に、蠢く化け物たちを一瞥し、心の内で呪詛を吐いた。
――今は、好きなだけ笑えばいい。
――必ず、お前たちに報いを受けさせる。
その一瞬、視界全てのバーテックスが動きを止めた。
バーテックスに、目に該当する器官はない。にも関わらず、若葉は確かにあれらの視線がその身に注がれているのを感じた。
ギシ……ッ、と結界が軋む。
これまでのようなバラバラの体当たりではない。密集した数十ものバーテックスが、

結界を破ろうと一斉に圧力をかけ始めたのだ。
異変は一ヶ所に留まらない。大橋を護る結界のいたる所でバーテックスが集まり、渦巻き、不可視の壁に大穴を開けようと動いていた。
咄嗟に四国側を見る。
目視で確認できる限り、避難はほとんど終わっていた。例え、今この瞬間に結界が破られたとしても、バーテックスが到達する前に作戦を完了できるだけの余裕はあるだろう。
「……ならば、あとは化け物どもが四国になだれ込むのを防ぐだけだな」
景色に無数の亀裂が走る。
遂に引き裂かれた結界の破れ目から侵入を果たしたバーテックスは、大橋に立つ若葉へと殺到する。それが勇者であると分かって向かってきているのか、あるいはただ人間がいたから殺そうとしているのか、無機質な化け物の意図は分からない。
押し寄せる敵軍を前に、若葉は刀の柄を握り直した。
報いを受けさせる――その決意は、圧倒的な数の暴力を目にしても揺らがない！
「化け物どもめ……私が、貴様らを殺してやる……!!」
大地を蹴った若葉の身体は、精霊の力によって瞬く間に彼我の距離を縮める。
白い濁流に飛び込んだ青の勇者は、バーテックス二体を一撃で斬り飛ばし、そして―

――見えなくなった。

「ッ、――――凍結（フリーズ）、解除（アウト）」

最後の一人――衛宮士郎の手から、魔剣が弾かれる。

即座に待機状態にあった投影が完了し、オーバーエッジにより強度を増した莫耶の白刃がバーテックスの攻撃を辛くも受け流す。

「■■■■■■■■……ッ！」

既に、バーテックスの動きは音速の壁を超えていた。

士郎では、視認することすら困難な速度で迫る致命の連撃。それを、投影した筋力と宝具の特性を最大限に活用し、生存のための最善手を引き寄せ続ける。

だが、それもここまでだ。

咄嗟の判断は、身体に刻み込まれた経験をもとに窮地を凌いでみせた。

だが、今の士郎は万全ではない。

本来ならば干将――左腕が埋めるはずの隙を、今の士郎には護る手段がない。曝された横腹に、バーテックスの追撃が吸い込まれていく。

「――――工程破却（ロールクラック）、全投影連続層写（ソードバレルフルオープン）……！！！」

出現した剣は、もはや宝具とは呼べる出来ではなかった。

士郎とバーテックスの間に突き立った何十本の剣の壁。名刀や名剣、錆びついた鈍らもあれば大剣に細剣、てんでばらばらの剣の数々。

そのどれもが、形を真似ただけの贋作だ。

創造の理念は不明、基本骨子も不備だらけ、構成する材質もでたらめ、制作に関連する技術も経験も年月も、一切の過程をすっ飛ばして、剣として成立しただけの鉄くずだらけだ。

そんなガラクタに、強度など期待できるはずもない。バーテックスの攻撃を防ぐ盾としては圧倒的に必要な機能が不足している。

だが、あらゆる要素を欠いた宝具もどきではあるが、内包する神秘だけは模倣してあった。

僅かな狂いもなく、全ての剣が同時に自壊する。

壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）――魔力の爆発は瞬時に膨れ上がり、周囲の全てを平等に吹き飛ばした。

全身をアスファルトの地面に叩きつけられる。

あまりの衝撃に呼吸が止まった。全身が悲鳴を上げているのを嫌でも実感する。

だが、まだ動く。

落ちかけた意識を再起動し、士郎は再び立ち上がった。

「……ぅ、ぉぉおおお、おおおおおおお……!!」

霞む目を凝らして見れば、バーテックスも既に再生を終えようとしていた。
筋骨隆々とした巨人が、その身を低く沈み込ませる。
ここまでの戦闘で何度も見た、突撃の構え。士郎との距離は三十メートルほどに広がったが、この進化型ならば四秒足らずで詰めてくるだろう。
「よう、やく……はぁ……は……思い出した、ぞ」
対する士郎は無手。
魔力は尽きかけ、固有結界を使うことはおろか、投影すらも四回が限度。
何十回にも及ぶ激突によって、夫婦剣や赤原猟犬（フルンティング）では奴を殺しきれないことは証明済み。
詰まるところ、あと四秒の間に、四回の投影でバーテックスの絶殺に至らなければ、殺されるのは士郎の方ということだ。
「その、腕が模した、武装……剣の、軌跡……身のこなし。そうだ……冬木で、俺は見た……」
想起する。
右手を掲げ、現れるはずの柄を掴み取る。
「――――投影（トレース）、開始（オン）」
剣というには、あまりに原始的な岩造りの大剣。

その膨大な重量を支えるのは、大剣と共に複製された担い手の怪力だ。
冬木の聖杯戦争において、セイバーとして招かれた英霊の有する最強の聖剣とすら打ち合った、大英雄の斧剣である。
「――――投影（トリガー・オフ）、装填」
なぜ、眼前のバーテックスがあの大英雄の技量を模倣しているのか、士郎には分からない。
打ち合うたび、弾くたびに洗練されていく技能が、過去に垣間見たバーサーカーの動きと当てはまった。ただそれだけの理由だが、士郎の中には奇妙な確信があった。
『コレ』は、贋作だ。
バーサーカーの一面だけを映し出した、出来の悪い模造品。
「■■■■■■■■■■……ッ！」
一秒、二秒、視界一杯に白い巨体が広がる。
振り下ろされる一撃を無視し、寸前まで敵の正体を見極める。
脳裏に描く軌跡は、急所を抉る神速の八撃。
ここまでくれば出し惜しみはない。残る魔力の全てを注ぎ込み、宝具に刻み込まれた英霊の絶技を出力し、八つのポイントに狙いを定める。
「全工程投影完了（セット）――――是・射殺す百頭（ナインライブズ・ブレイドワークス）」

「……■、■■……!?」

士郎の持つ手段の中で、最上級の威力を誇る連撃。

踏み込みと共に放たれた八筋の斬撃は、音速の標的を容易く砕き伏せる。大小様々な破片になったバーテックスは、あっさりと大気に溶けて消滅した。

「これで……ッ、最後、か……?」

突き立てた大剣に寄り掛かって息を吐く。

一時間ほど前はバーテックスに溢れていた大橋も、今は静寂に包まれている。二年前半もの間、絶えずバーテックスと交戦してきたことを思うと、あの白い姿が一切見えないことがかえって不気味に思える。

「藤ねえ、遠坂や桜は、もう四国の中か」

冬木の住民が転移してから、それだけの時間は経過している。

集団パニックにでも陥っているならそうも限らないが、士郎の強化した視力でも逃げ遅れたような人影は――――、

「……あれは、」

弓兵の真似事をしている身として、眼の良さには昔から自信がある。

見つけた青と白の装束には見覚えがあった。

若葉の戦闘は、まさに修羅のようだった。

精霊――源義経の力で得た機動力を最大限に発揮し、視界に入ったバーテックスを手当たり次第に両断した。周囲に群がる小型の網の目をすり抜け、強引に押し通り、斬り開き、怨敵を次々と消滅させていった。

だが、いつまでも一方的な戦いにはならない。

勇者といえど、若葉は人間だ。戦いが続く限り消耗し、集中は乱れ、次第に危うい場面が増えていく。

「ぐ、ぎ……ッ!?　この、、!!」

同時に襲い掛かった五体のバーテックスを斬り払った直後、右足首に激痛が走った。

逆手に握った刀で、食らいついた小型を突き殺す。だが、体勢を整える間もなく今度は大質量に任せた体当たりが迫り来る。

「がはッ……!」

構えた刀の上からまともに受けた。

後はまるでピンボールのように何度も弾き飛ばされ、成す術もなく地面に墜落する。

――これで、終わりなのか……?

死ぬかもしれない、という事実に恐怖は感じなかった。

仰向けのぼやけた視界が白く染まっている。その内の一体でも多く道連れにしてや

ろうと放してしまった刀を探る手が、異変に気付いて止まった。
「な、に……？」
困惑する若葉をよそに視界の白が晴れていく。
彼女が起き上がり意識がはっきりした頃には――――周囲に溢れていたバーテックスの大群は一体も残さず消えていた。
「逃げた、のか……そんな、」
馬鹿な、という声は音にならない。
勇者を恐れて逃げた、数を失ったから撤退した、という理由はあり得ない。若葉がどれだけ殺そうと、バーテックスは全く変わらず襲い掛かってきた。そんな化け物が、倒れ伏した敵を見て逃げるという選択肢をとるはずがない。
あれらは、殺せたはずの若葉を放置してこの場を去ったのだ。
「ふざけるな……貴様らに、多くの罪なき人々に牙を突き立てた化け物にかけられた恩など、呪いと何も変わらない……!!」
その事実を認めて、生き延びたことへの喜びや安堵よりも怒りと憎悪が湧き起こる。
多くの人々に恐怖を、痛みを、苦しみを与え、命を奪ってきたバーテックス。あれらに相応の報いを受けさせるために、若葉は勇者としての訓練に邁進し、力をつけ、その果てに例え刺し違えたとしても一体でも多くのバーテックスを殺す、と決意を固めてい

た。
　その決意を、踏みにじられたように思えた。
「何事にも、報いを……私は……」
「乃木、若葉さん、だったか」
　突然、かけられた声にハッと思考が止まる。
　顔を向けると、そこに冬木の勇者代理が立っていた。
「無事、じゃなさそうだな、その足。歩けるか？」
「え？　あ、あぁ……大丈夫だと、思います」
　そう答えてから、若葉は男の惨状に気づいた。
　左手は血に染まり、全身ぼろきれの様になった勇者代理はホッと安堵の息を吐いた。
「そうか、なら先に戻っていてくれないか。もうすぐ結界も消える、ここは危険だ」
「いえ……同行します。あなたを四国の結界内へ誘導するまでが、私たちのお役目ですから」
「それは……いや、だがな……」
　当たり前の返答のつもりだったのだが、男の顔に微かな焦りが浮かんだ。
　何か言いかけては口を閉ざす。若葉を先に帰らせたいのだろうか、だんだんと表情が深刻になっていく。

理由は分からないが、彼を放置して帰ることなどできるはずがなかった。勇者として譲歩するつもりのない若葉の意思を感じたのか、先とはニュアンスが違う重いため息を溢す。

「……説明が前後したな。きちんと話す、その上で頼みを聞いてくれるとありがたい」

「もしや……まだバーテックスが残っている、とかでしょうか?」

「勘が鋭いな、君は」

驚きを顔に浮かべたまま、男は右手をまっすぐ伸ばした。

人差し指は大橋の先、本州のある方角を指している。それがいったい何を示しているのか。

若葉は懸命に目を凝らして、やがて怪訝そうに首を傾げた。

「……何も見えませんが」

「まだ本州側だからな。橋を辿り始めてはいるんだが、大型バーテックスが接近しつつある」

猶予は五分程度だ、と若葉に見えない敵の到達時刻を告げる。

「その間に、避難誘導と連絡を頼みたい」

「……頼みごとの内容は分かりました、だがわざわざあなたが残る必要もないのでは?」

男は顔色一つ変えず、当然のように言った。

「物見に眼は必要だ――――万が一、奴の足が速まったなら足止めもいる」
その一言で、なんとなく若葉は目の前の人間のことが分かった気がした。
そして、次にかけられるだろう問いも――――その返答はもう決まっている。
「ここは私に任せてくれ。君は、四国に戻って、」
「私も――――力になるはずだ」
スマホを取り出す。
通話機能を開きながら、呆気にとられた様子の勇者代理に告げる。
「四国を護る勇者として、乃木家に生まれたものとして――――バーテックスを他人任せにするわけにはいかない」

第十話　リミテッド・オーバー③

神樹の防衛機構は大きく三つに分けられる。

一つは、四国全域を囲う結界。これはバーテックスの侵入を阻む防壁であり、海上に視認できる樹木の壁から上空及び地下まで不可視の領域を構築している。

一つは、適正ある人間への加護。『勇者』と呼ばれる者の力は神樹からもたらされたものであり、この加護なくして人類はバーテックスに抗うことはできない。バーテックス対抗組織・大社の手により、この加護を更に呪術的・科学的に効率化と増強を果たしたものが勇者たちの用いる『勇者システム』である。

そして、最後の一つが――神樹が外敵から人々を守るため、バーテックス侵入時に行われる現象。結界内のあらゆるものが停止し、程なく樹海で覆い尽くされる。

大社はそれを『樹海化』と呼んでいる。

「ぐッ……!?」

体勢を崩した勇者にバーテックスが襲いかかる。

大きく開いた顎が獲物を捕らえる前に、
「そりゃぁぁぁぁぁッ!!」
ゴッ!!　と鈍い音が響き、旋刃盤が突き立った巨体が消滅する。
すぐさまワイヤーを手繰る球子の手際に淀みはない。もはや手足に等しい愛武器を振りかぶりつつ、
「どうすんだコレ!!　全然、キリないぞ!!!!」
「……そんなに怒鳴らなくても、十分聞こえるわよ」
無限に思える物量の敵にうんざりした声を上げていた。
隣にいた千景も、何度目かの大声に顔を顰めながらも内心同じ気持ちだった。それは、後方でバーテックスを狙撃している杏も、最前線で拳を振るっている友奈も同じに違いない。
樹海化が起きてから二時間以上が経過して――未だ、彼女たちの視界はバーテックスの大群で埋め尽くされているのだから。
「でも!　さっきみたいな強そうなのは!　全然、出てきてないね!!」
ラッキー、とポジティブな捉え方の友奈も、流石に疲れが動きの端々に滲み出ている。
「温存しているのかもしれません。攻め過ぎず、常に警戒していきましょう」
「大丈夫よ、伊予島さん……二人とも、今のところ無茶はしてないわ」

「……千景さんも、無理しないでくださいね」

樹海化直後は恐怖に震えていた杏も、訓練時と変わらない的確な援護と指示で戦線を支えている。ともすれば戦えないのではないかと心配していたが、それも杞憂に終わり変則的ながらも練習してきたフォーメーションを維持できていた。

その彼女の気遣いに、千景は微かに頬を緩めた。

「ありがとう。でも、これは私にしかできないことだから」

七人御先。その力を宿すことで、千景は七つの場所に同時に存在することができる。伝令役を兼ねた前衛に五人、後衛の補助に二人の配置。勇者を一人欠いた戦線を維持するための苦肉の策だったが、バーテックスの攻勢を分散させ予想以上に効果を上げていた。この二時間で倒したバーテックスのうち、半数以上が千景の戦果である。

だが、それも万全ではない。

精霊をその身に宿す『切り札』は、使用者の身体に大きな負担をかける。短時間で二度使用した千景は、気力も体力も限界に近かった。

「……ウジみたいに湧いてくる、気持ちが悪い」

吐き捨てる言葉にも覇気がない。

まだ意識ははっきりきているが、反応速度や手足の感覚がやけに鈍い。『切り札』を解かない限り、体力は急速に消耗していく。尽きれば、『切り札』の維持もままならなくな

ることは明白だ。
それでも、千景は『切り札』を使い続けるつもりだった。
「……私にしか、できないことだから……」
代わりはいない。他の誰でもない、自分が必要とされている。
それは、彼女にとって手にしたこともない何か――掴みかけたものを逃すまいと、気力を無理くり捻出する。
もう、無価値な自分になりたくない。
千景にとって、それは全てだった。

「あったまイイなぁ……あれ」
「考えたのは私じゃなくて、伊予島さんよ」
分裂した千景がバーテックスの群れを引き裂いていく。
その鬼気迫る戦いぶりに、思わず感嘆の声が零れる。武器の性質上近接戦闘が不得手な球子から見れば、次々と敵を撃破していく勇者の姿は痛快そのものだった。
とはいえ、バーテックスもやられてばかりではない。
切り込んできた少女を取り囲み、孤立したところを数の暴力で圧殺する。この短時間で正面からの戦いは分が悪いと悟ったのか、前後左右上方あらゆる方向から勇者へ殺到

していく。
取り回しの悪い武器の勇者に抗うすべはない。瞬く間に三人を押し潰し、方々から勝ち誇るように甲高い奇声が上がった。
「……次」
そこに、無傷の千景が斬りかかる。
その身に宿した精霊ーー『七人御先』。その能力のお陰で、七人の千景がすべて同時に倒されない限り常に七人の千景が健在であり続ける。
例え前衛の五人が同時に撃破されたとしても、後衛の二人がいる限り倒された千景は次の瞬間に別の場所に存在する。体力が続く限り、戦力の損耗を限りなく抑えることができる。
敵の総数がわからない状況において、最適解に近い戦術だった。
そして、
「見つけた……伊予島さん、そこから北北西の方角に群態があるわ」
「ッ！　わ、わかりました！」
当然、前衛ばかりが戦うわけではない。
勇者の端末にある索敵アプリを用いて、後衛の千景が勇者とバーテックスの配置を常時確認している。どんな変化をするかわからない進化型もどきの処理は、遠距離攻撃の

できる杏と球子の担当だ。
　完全に融合してしまう前ならばただの小型の集合体、数を潰せば処理できる。だが敵の融合速度も速く、思い通りにはならない。
「あ〝ぁ〝ッ!!　スマン千景、友奈!」
　無事に処理しホッと息をついたのも束の間、間髪入れずに球子の絶叫が聞こえた。
　見れば、やたら曲線的な形状の進化体が形成されようとしている。
　再び投じられた旋刃盤の刃があっさり弾かれたあたり、強度以外にも何か仕掛けがあるのかもしれない。
「もしかして、飛び道具が効かない……?」
「……なら、私が頑張る!!」
　友奈の思考は即断即決だ。
　刃が立たない相手でも、自分の打撃なら通るかもしれない。
　確証もない推測にかけて、進路を遮る小型を殴り飛ばしながら矢となって駆ける彼女。肉薄するのに五秒とかからない。
「勇者、パ――――――ンチッ!!!」
　轟音と衝撃。真正面から殴られたバーテックスは、しかし友奈の攻撃がまるで効いてないかった。

反動で痺れる拳を二度、三度と叩きつける。が、損傷どころか手応えすら感じられない。構わず前進を続けようとする敵の様子に、

「たとえ、効かなくったって！」

友奈の選択は力押しだった。

拳を構え直した彼女の周囲を暴風が渦巻く。その身に宿す精霊は『一目連』、その能力で束ねられた風が収束し両腕を包み込んでいく。

「何度だって、繰り返す!!」

瞬間火力と手数の増加。

それは実際、有効な一手だった。バーテックスは『斬撃』に特化した進化を遂げたが、唯一『打撃』を主体とする友奈相手にはせいぜい頑強な防殻程度でしかない。耐久を超える火力に曝されれば、撃破される可能性は十分にあった。

――――それは逆に、友奈が倒されてしまえば、勇者は対処する術を喪うということでもある。

「ダメです、高嶋さん!!」

杏の気づきも既に間に合わない。

僅か十メートル、あと一度の踏み込みで到達する間合い。

狙い通りに接近する獲物に向けて、バーテックスの外殻が勢いよく弾け飛んだ。

「!!」

それは厚い殻の表層でしかないが、それでも人間の頭ほどの質量はある。複数被弾すれば、いくら神樹の力が宿った勇者といえど致命傷は避けられない。

友奈は回避するそぶりも見せていない。塞がれた視界の向こうに存在する標的に、決定的な一歩を踏み込んでいく。

杏と球子はなすすべもなく、千景は蒼白な顔で携帯端末を握りしめた。

射撃も、旋刃盤も、分身体も間に合わない。

間に合うとすれば、一人だけ。

「――決めろ、友奈――！」

「ッ、千回、」

疾風と火花が舞い散った。

突然開けた友奈の視界にあったのは、両断され宙に浮く残骸と火花に彩られた進化体の姿。

迎撃を予想していなかったのか、奇妙な叫びをあげるバーテックスの硬い外殻に友奈の拳が激突する。

一撃、二撃、三撃、四撃――――回転は際限なく加速していく。

「連続勇者、パ――――ンチッッッ!!!!」

千の拳撃が敵を砕くのに、数秒すらも要らない。
暴風が家屋を破壊するように、絶え間ない拳の嵐に襲われた進化体バーテックスは文字通り砕け散った。

友奈がバーテックスを倒したその瞬間を、若葉は複雑な想いで見ていた。
「……友奈……」
この戦いが始まる前、『切り札』を使うのは自分一人だけにしようと考えていた。
精霊の力を人の身に降ろす『切り札』は使用者の負担も大きく、大社は勇者に対してできる限り使うなと再三再四念を押していた。だからこそ、使う必要に迫られたなら自分がその負担を請け負おうと決めていたのだ。
だが結局、若葉は二度『切り札』を使用したが、友奈も一度、千景は二度も使っている。
自分で決めたことも守れず、何が勇者だろう。
傷つき、疲弊した仲間たちを見て、そう思わずにはいられなかった。そして、僅かに視線を巡らせれば、未だ多くの元凶どもが隙を窺い蠢いている。
気づけば刀の切っ先を向けていた。
「みんな、遅れてすまなかった！　勇者、乃木若葉！　これより戦線に加わる！」

「若葉ちゃんカッコイイ――――!!」

歓声を上げる友奈の隣で、千景が「遅過ぎよ」と呆れ顔になっている。

全くもってその通りだ。意地を張らず、最善だけを考えれば彼女にここまで負担をかけることはなかっただろう。ここまで戦線を維持できていたのは、千景の頑張りによるものが大きい。

何事にも報いを――無茶をさせたのなら、今度は自分が無茶をする番だ。

「時間もそうかけられない。一気に行くぞ！　勇者たちよ、私に続け!!」

青い軌跡が再び死地奥深くに食い込み、消える。

そして――――

若葉が結界に飛び込む一分前、士郎は独り大橋にいた。

「……ここは任せて先に行け、か。気障なことをいうんだな、俺も」

厳しい視線の先には一体のバーテックスがあった。

先刻までの巨大な球状個体ではない。小型とサイズの変わらない、五枚花弁の華を想起させる形状の進化体。

それは、巨大バーテックスの内側に隠れ潜んでいた個体だった。巨体を形成していた

バーテックスが分裂し、別方向から結界内へと大挙して侵攻する中でも微動だにしなかった。
移動しないのか、できないのか。後者の場合は撃破が難しくなる。
今の士郎は、弓を握れないのだ。
「投影の残弾はあと二回。リスクを取るなら手はあるが、」
危険性を検討している猶予もない。位置が変わらないからといって、動きがないわけではないのだ。
「――ッ！」
姿に異状なく、急速に膨張していく魔力の気配。
閉じ気味だった花弁は今や満開。
その奥に、眩い炎光がチラリと覗く。
瞬間、疵まみれの斧剣が勢いよく宙に放り投げられた。
「――――体は剣で出来ている」
樹木の壁に食い込んだ岩塊は、花弁と正対するのに都合のいい足場になった。
間髪入れずに詠唱を始め――――それが、もう遅いことは分かっていた。
「――――血潮は鉄で、心は――――、チッ」
無音の絶叫／咆哮が空間を震わせる。

すぼまっていく花弁はまるで砲塔のようで、直後……視界全てを白が埋め尽くした。

「――――熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）」

純白の魔力放出、それを食い止めた≪≪六枚花弁≫≫の盾こそは、士郎の有する中で最強の結界宝具。

本来七つある守りは、一つ一つが古き時代の城壁に匹敵するほどの防御力を誇る。

だが、

「……、ぐ……ッ!?」

伸ばした右腕からブチブチと引き千切れる音がする。

痛みを感じたのも一瞬、信じられない重圧を抑えようと砕けた左手を支えに回した。

なけなしの魔力、その全てをつぎ込んだ護りを手放せば士郎の身体など一瞬で蒸発するだろう。

「ぐ、ォ――――あああああああああ……ッ!!」

揺れる視界の中で、二枚の花弁が散った。

残るは四枚――いや、減って三枚。不完全な投影で一秒でも長く押し留める。

光量は以前変わらず、さらに二枚が弾け飛んだ。

「あああ、ああああああああああああああああああああ!!」

残る一枚――最後の盾にも亀裂が走っていた。

割れた隙間から漏れ出た熱が衣服を焼き、樹木からは煙が上がる。砕かれるのは時間の問題、

その限界を延ばすには、

致命的に魔力が足りない。

「　　、　　」

最後の盾が砕ける寸前、脳裏をいくつもの光景が過ぎていった。

今、この時までに見てきた景色。

変わり果てた冬木の街、絶えることのない襲撃の日々、全てが変貌したあの夜。

旅をした中で見てきた様々な国と文化、そこで暮らす人々の顔。衛宮士郎が救えた顔、衛宮士郎では救えなかった顔。ロンドンの街並み、時計塔での学び、出自から価値観から一人として同じではなかった魔術師たち。

そして、第五次聖杯戦争。

別れの言えなかった金髪の剣士がいた。

現代を裁定しようとした金色の王がいた。

飄々とした態度で手を貸した槍兵がいた。

小さな主人を守ろうとした大英雄がいた。
変化した願いに縋った魔術師がいた。
疾風のように駆ける騎兵がいた。
そして、
赤き弓兵の双眸がこちらを真っすぐに射抜いていた。
『……お前の目指す正義の味方とはその程度か、衛宮士郎』
皮肉の多分に含まれた問いを最後に、意識が現実に引き戻される。
宝具の破壊が加速する。もう、あと一秒も猶予はない。
目前の灼熱を前に、士郎の魔術回路が
「――――投影（トレース・オン）、開始」
限界を振り切った。
「――――熾天覆（ローアイアス）う七つの円環（アイアス）!!」
再現できなかった七枚目、伝承においても砕けなかった最後の花弁が展開される。
目や鼻、耳からも血が滴るのを感じる。全身の血管が悲鳴を上げ、頭の中もかき回されたように痛みが起きる。
それら全てを無視し命を削って生み出した魔力を即座に盾へと叩き込んだ。この投影が保てなくなった瞬間が、士郎とそして四国の最期――!

「はぁ……ッ、があああああああああああああああ………………ッ!!」
割れるような頭痛は意識の漂白すら許さない。
時間すら明瞭でない攻防の中、血に濁った士郎の瞳が信じがたいものを見た。
「■■■■■■■■■■――――!」
それは、巨大な魔力塊。
形成のためか魔力放出が弱まった一瞬だけ窺えた密度は、サーヴァントの宝具にも匹敵するほど。万全であっても受けられるか定かでないそれを、今の士郎が凌げる道理はない。
だが、一手先んずることが叶うならば、窮地も無二の勝機になり得る。
「投影(トレース)、開始(オン)」
瞬間、士郎以外の時間が止まる。否、止まっていると感じるほどに彼の内部が加速しているのだ。
検索し、選出し、解析し、投影する。
身体に刻み込まれた手順は瞬く間に組み上がる。士郎の頭上、何もない空間に浮かび上がった剣は何でもない、ただ頑丈さが取り柄の無銘の剣――鈍らの器。
それを、今まさに放たれようとしている魔力塊へと射出した。
着弾の直前で自壊した鉄剣から小規模な爆発が起こり――着火、

「……う、？」

気付くと、士郎は樹木の中にいた。

引きちぎられた枝がトンネルのような光景を作り出している。霞のかかった意識でなんとか、ここが神樹の結界の中だと判別がついた。

手足は――酷い状態だった。右腕は肘から先の感覚もなく、元から重傷だった左腕はねじ切れる寸前で妙な方向に向いている。両足は下手に踏ん張ったせいだろう、逆方向に曲がっていた。

おおよそ動ける状態ではない。

大雑把に診断を下し、脱力する。結界の損傷こそあったが、最小に抑えることはできたのだ。冬木の人々の避難も無事完了し、強力なバーテックスも退けることができた。根本的な状況の解決には全くなっていないが――今回だけ見れば、成果がないわけじゃない。

……どうだ、爺さん。少しは俺も、正義の味方を張れてるかな。

安堵すると共に、ずっと張りつめてきた糸が緩むように自我が闇に沈んでいく。

「……くそ……」

それを許さない存在があった。

数瞬前までと変わらない位置にいた進化体バーテックスも、さすがに無傷ではなかった。

その図体の半分が吹き飛び、花弁のような器官も二枚が辛うじて繋がっている状態だ。砲塔を兼ねた部位が欠損しているということは、すぐにあの魔力放出を行ってくる、ということはないだろう。

今なら撃破できるかもしれない。

「ぐ、ううう……ッ」

肉体は既に使い物にならない。魔術回路も空回りするばかり。

目の前の深手を負った敵に打つ手がない。

焦る士郎の視線は、進化体に近づいていく小型の群れを捉えていた。小型を取り込まれれば瞬く間に進化体は修復を終えてしまう。そうなれば、今度こそ四国の結界は破壊される。

足掻きは徒労に終わり、集結したバーテックスは悠々と進化体と結合しようと近づく。

そして、彼女は間に合った。

「あああああああああッッ!!」

周囲に漂う小型を神速の影が蹴り跳ねる。
目にも留まらぬ斬撃に切り刻まれ、ぼろきれのような進化体に加速しきった若葉の刀が突き立った。
その一撃がとどめになったのか。
静かに消滅していく進化体と、その上に立つ凛々しい少女の姿を見て、
……確かに勇者だ、と。
消えいく意識の中で、士郎は妙な納得を得ていた。

【勇者御記】検閲済み
本日未明、大橋において冬木の人々の護衛任務に臨む。
私たちにとって初めての実戦で、危うい場面も多かった。連携訓練をしていなかったらと思うと今でも背筋が凍る。
冬木の勇者代理であった衛宮士郎さんの助力もあり、犠牲もなく、戦えない人々から負傷者がでることもなかった。だが、郡と高嶋に■■■を使用させてしまった。
我々勇者は、世界をやつらから取り戻すための矛。数が少ない以上無理は避けられないのだろうが……己の力のなさが憎い。
やつらに――バーテックスに報いを与えるためにも、さらなる鍛錬を積んでいかなけ

ればならない。

第十一話　平穏／不穏

『……大社から公開された情報は以上です。■■■■さん、今回の作戦の結果を受けて今後どのような展開になると予想されますか？』

『そうですね……やはり、他地域と合流できたこと、犠牲を出さずバーテックスを退けられたことは非常に大きな成果といえるのではないかと……勇者が戦力として機能することも証明されましたし、』

テレビから延々流れる賞賛の言葉。

カチカチと無機質な音がチャンネルを切り替えていく。

『……て！　今回は勇者様たちが寄られたというお店を取材しその人柄を、』

『……なにより大きいのは、犠牲はおろか負傷者すらでなかったということです！

大社は情報を明かしていませんが、今後勇者部隊というものができれば本土奪還も夢では、』

『……それでは、避難された冬木市の方々にお話を伺っていこうと思います。すみませ――ん！』

『……勇者様とは何か。大社職員のAさんの話から、彼女たちの暮らしを、』

チャンネルが一周した所で、若葉は携帯テレビの電源を落とした。

「……今日も、どの局も代わり映えしなさそうだな」

この二日、どこのチャンネルも似通った内容の番組ばかり放送している。大社が犠牲ゼロの戦果を大々的に広報した結果らしい。

四国の人々は作戦の成功に歓喜し、冬木市からの避難住民を快く迎え入れた。勇者への戦力的な不安、バーテックスへの恐怖を払拭しようという大社の狙いはある程度達成できたと言えるだろう。

それは、さっき映っていた番組で興奮気味に喋り続けていたコメンテーターの様子からもよく分かった。疲弊していた人々にとって勇者の活躍は活力になるに違いない。

ただこうも同じ内容を繰り返されると、当事者としては何とも言えない気分になってしまう。

「まぁ、昨日の今日ですから……けれど、思ったよりも大騒ぎになってますねぇ」

丸亀城の食堂で勇者揃っていつもの昼食（元々は若葉発案）。

いつもは各々好きな話題に花を咲かせるが、今日は自然と前日の話で持ち切りになった。

「しっかし若葉さぁ、結局足は大丈夫だったのか？　包帯グルグル巻きだけど」

「骨には異常ないそうだ。問題ない」
心配そうな球子に、若葉は大丈夫だとギプスで固定された右足を持ち上げてみせた。
実際は十分重傷だが、後遺症の心配はないと言われている。
移動の不自由さはあるものの、それもすぐに慣れる。一週間程度で訓練にも復帰できるだろうと、若葉はそれほど重く考えていなかった。
直後、場の空気が急低下した。
「問題ない、じゃありませんよ？　若葉ちゃん」
カツン、と箸を置く音が響く。
薄っすら笑みを浮かべて、ひなたが若葉を見据えていた。声音も表情も優しいが、それは見かけだけに過ぎない。付き合いの長い若葉には見えない怒りを確かに感じていた。
「千景さんから聞きました。その怪我、若葉ちゃんの独断専行が原因だと」
「なッ……千景!?」
裏切ったのか！　と視線を送るが、一つ年上の仲間はそっぽを向いたまま「事実じゃない」と取り付く島もない。
「……しかし、」
「しかしじゃありません！」

「あのタイミングなら最後尾の私が殿（しんがり）を務めるのが一番合理的だ」
「それは若葉ちゃんが一人離れていたからです！　連携訓練を呼びかけた若葉ちゃんが、単独
行動をとっては本末転倒じゃないですか！」
「む……むむむ、」
言葉に詰まる若葉。
友奈が仲裁に入ったもののひなたの『注意』はなかなか収まらず、三十分を要した。
「……タマは、いま決めたぞ。ひなただけはぜったいに怒らせないようにする」
「……タマっち先輩は難しいんじゃないかなぁ」
それは球子本心からの誓いだった。

その日の放課後、ひなたと若葉は共に放送室に向かっていた。
若葉は諏訪との通信をするため、ひなたはその付き添いである。
「……では、まだ衛宮さんの意識は戻らないのですか？」
「あぁ、遠坂さんの話では命に別状はないそうだが」
無理もないだろうな、と若葉は心の中で付け足した。

壁の外で士郎を回収した時、彼の負傷は若葉の比ではなかった。両足はねじくれ、腕は曲がり、特に左腕は辛うじて千切れていないような状態だったのだ。

一命を取り留めたのは奇跡に近い。

「……あの人がいなければ、神樹の結界は破られていたかもしれない。目が覚めたら、勇者としてお礼をしに行かなければならないな」

「ええ。その時は私もついていきます」

ひなたの言葉に頷く。

そうこうしているうちに、二人は放送室の前に着いていた。

通信が終わったら落ち合う約束を交わし、若葉は一人通信機に向き合う。

前日は作戦後のごたごたもあって通信できなかったが、その分今日は歌野に話したいことが山積みになっていた。作戦の成功、聞いたことのない形状のバーテックス、自分たちの反省、冬木の勇者代行……等々、何から話すか迷うほどだ。

高揚する気分を自覚して、少し恥ずかしさも感じながら通信機を起動させ――――、

「……出ないな」

諏訪との通信は、その日繋がることはなかった。

その日、諏訪の天気は快晴の予報だった。
諏訪の勇者：白鳥歌野の勘が根拠の予報だが、実はこれまで外れたことがない。
「……これは、なかなかデンジャーな光景ね……」
だから、地平線を埋め尽くす何かに初め、雪雲だ、予報が外れたと小さな騒ぎが起きた。
歌野が目視で確認して、すぐに間違いなことは分かった。
雲ではなかった。無数のバーテックスが、微動だにせずひしめき合っていただけだ。
「昨日は確か、乃木さんたちのミッション・デー……ってことはなるほど、冬木の次はここをターゲットにしたというわけね」
結界の外の高台で仁王立ちになって、歌野は笑う。
例え、どれだけ絶望的な戦いであっても。勝ち目など、初めからなかったとしても。
歌野は、皆の『日常』を守ると決めているのだから。